

千葉県八千代市

高津新山遺跡

—昭和56年度確認調査の概要—

1982・3

八千代市教育委員会

序 文

近年、急激に開発が進む本市にあって、市の姿の変貌は著しいものがあります。地形は日増しに姿を変え、山林は伐採され、忽然と宅地等が出現している、と言う現在です。これらの開発は、確かに人々の生活水準を高めるといふ目的があると思います。しかし、祖先から長い年月にわたって守り伝えられてきた、かけがえのない文化遺産（文化財）を不注意な行為によって失うことのないよう、私達は努めていかなければなりません。

この本は文化財保存事業のうち埋蔵文化財緊急調査として、国及び千葉県の補助を受けて実施した、高津新山遺跡の確認調査の概要の報告です。調査は宅地化の波が押し寄せる本市にあって、その傾向が顕著な地域の一つである高津地区で、そういう行為に先立って、将来に保存策を講ずる基礎資料を得ることを目的としたものです。

調査の結果、先土器時代から平安時代に至る長い年月にわたって、先人たちの暮らしの場であったことがわかりました。先人たちが日々の暮らしの中で考え、作り、使った石器や土器が出土し、また、住居の跡や土壌が数多く発見され、多くの成果を得ることができました。

本書を作成するにあたり、この調査に御協力いただいた土地所有者の方々、厳寒の中で調査に参加された皆様に謝意を表する次第です。

また、今回、この調査概報が刊行されるにあたり、この資料が広く活用いただけるならば幸いです。

昭和57年3月

八千代市教育委員会
教育長 大熊章一

例 言

- 1、本書は千葉県八千代市高津字堀込1652番地外の、確認調査の概要をまとめたものである。
- 2、本遺跡の調査は、準備を昭和56年7月より進め、発掘は昭和56年12月2日に開始し、昭和57年2月27日迄実施した。
- 3、本書の報告の内容は昭和57年2月10日迄のものである。
- 4、本書の執筆は分担執筆とし、第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章1～3、第Ⅳ章1・2及び3の土師器、須恵器、その他の遺物、第Ⅴ章を朝比奈竹男が、第Ⅳ章3の先土器時代の遺物、縄文時代の遺物、台地上での表採資料を久保脇美朗、第Ⅲ章4を星忠が担当した。
- 5、本遺跡の出土遺物及び記録図面は八千代市教育委員会が所掌し、高津新山遺跡調査事務所に現在保管している。
- 6、調査にあたって地元の方々の御協力・御助言を賜わり、また器材等についてサービスセンター、区画整理課、市教委・青少年課より御協力を得た。記して謝辞としたい。
- 7、調査組織については以下の通りである。

調査主体 八千代市教育委員会

大熊章一（八千代市教育委員会教育長）

事務局 清水盛人（八千代市教育委員会社会教育課長）

小笠原和也（八千代市教育委員会社会教育課文化係長）

川上俊一（八千代市教育委員会社会教育課主事）

調査担当者 朝比奈竹男（八千代市教育委員会社会教育課主事）

調査員 久保脇美朗

調査補助員 有本勝・池田建・板倉浩二・木村進・小菅雄二・佐藤明・高橋健次・野々山進
・長谷川浩二・藤田篤・星忠・吉井淳則

調査参加者 秋山和子・秋山正道・石井きよ・石井慶子・板倉春枝・市岡梅子・岩井勝子・岩井きく・岩井きみ子・岩井けい子・岩井純子・岩井千恵・岩井とく・岩井登里・岩井波江・岩井英子・岩井美智枝・岩井みよ・岩井栄枝・大山きよみ・尾崎登美枝・尾崎栄子・檜山栄子・黒沢ます・小林健一・小林ヨネ・座間みち子・鈴木幸子・鈴木時子・鈴木ふみ子・鈴木みよ・須田和子・染谷圭子・高橋道子・立石ちよ・立石てる・立石久夫・中台せつ・中村たつ子・矢橋和子・矢橋三代子・吉川ます・和田さだ子

整理参加者 秋山利光・秋元百合子・植田正子・内山睦・大坪智子・荻原伊津子・勝又寿子
・佐治節江・鈴木孝子・高橋房子・広田則子・瀨上妙子

目 次

第Ⅰ章	発掘調査に至る経過	1 頁
第Ⅱ章	遺跡の立地と歴史的環境	2 頁
	1 遺跡の立地	2 頁
	2 周辺の遺跡と歴史的環境	2 頁
第Ⅲ章	調査の概要と経過	6 頁
	1 発掘調査の方法	6 頁
	2 調査の経過	6 頁
	3 日誌抄	6 頁
	4 高津新山遺跡の層序	8 頁
第Ⅳ章	遺構及び遺物	10 頁
	1 第01号住居址	10 頁
	2 第02号住居址	12 頁
	3 グリッド出土の遺物	16 頁
	先土器時代の遺物	16 頁
	縄文時代の遺物	18 頁
	土師器・須恵器	22 頁
	その他の遺物	25 頁
	台地上での表採資料	27 頁
第Ⅴ章	小 結	30 頁

挿図目次

第1図	高津新山遺跡の位置と周辺の遺跡	3頁
第2図	高津新山遺跡の地形測量図及び遺構 出土グリッド分布図	5頁
第3図	高津新山遺跡の土層	9頁
第4図	第01号住居址実測図	11頁
第5図	第02号住居址実測図	13頁
第6図	第02号住居址のカマドと出土の遺物	14頁
第7図	先土器時代の遺物	17頁
第8図	縄文時代の遺物(1)	19頁
第9図	縄文時代の遺物(2)	20頁
第10図	グリッド出土の土師器・須恵器(1)	23頁
第11図	グリッド出土の土師器・須恵器(2)	24頁
第12図	その他の遺物	26頁
第13図	台地上での表採資料	28頁

図版目次

図版1	遺跡遠景(東側・八千代中学校屋上より)	32頁
	遺跡近景(R・S・T区)	32頁
図版2	発掘調査風景	33頁
	高津新山遺跡の層序	33頁
図版3	第01号住居址及びカマド	34頁
図版4	第02号住居址及び土層堆積	35頁
図版5	第02号住居址の遺物	36頁
図版6	第03号住居址及び貝層出土坵確認状態	37頁
図版7	先土器時代の遺物	38頁
図版8	縄文時代の遺物(1)	39頁
図版9	縄文時代の遺物(2)	40頁
図版10	グリッド出土の土師器・須恵器(1)	41頁
図版11	グリッド出土の土師器・須恵器(2)	42頁
図版12	その他の遺物	43頁
図版13	台地上での表採資料	44頁
図版14	ポイント出土状態	45頁
	土師器甕出土状態	45頁
図版15	縄文式土器出土状態	46頁
	土師器坏出土状態	46頁

第 I 章 発掘調査に至る経過

高津新山遺跡が所在する高津地区は、昭和30年代より住宅化が進み、八千代台地区（旧高津新田）や高津団地の造成が行われ、農地、山林が次第に宅地へと変貌していった。そのような状況の中で本遺跡所在地は、京成電鉄の最寄り駅迄15分位の場所であり、広大な農地として残ってきた。このような周囲の環境変化によって、水質汚濁等もあり、地元では圃場整備も一時期考えられたようである。

昭和52年8月、八千代市都市部より無計画な宅地化をさけようと都市計画事業の一環としての「区画整理事業を計画したい」とのことで、文化財保護法57条3-3により埋蔵文化財の所在の有無の照会があり、市教育委員会は千葉県教育委員会へ市埋蔵文化財包蔵地番号57・新山遺跡が所在する旨、副申した。県教育庁文化課の現地踏査後、土師器散布地との回答を得た。

その後県教育委員会、市教育委員会、市都市部と協議を重ね、昭和53年3月県教育委員会より、記録保存の措置もやむを得ないと思われ、細部については更に協議の要ありとの通知を得た。

しかし、区画整理事業計画も進捗を見せず、個人の宅地化が進行する一方で、昭和55年4月・都市部より確認調査の実施依頼を受けた。

市教育委員会も宅地化の波に洗われている高津新山遺跡の範囲、性格を把握することも急務とし、保存策を講じる基礎資料を得ることを目的として確認調査を実施することとなった。

このことについて市教育委員会社会教育課は文化財補助事業（埋蔵文化財緊急調査事業）として行うべく県教育委員会と協議を重ね、昭和56年度に国庫補助、県費補助を得て実施した。

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

1 遺跡の立地 (第1図)

本遺跡は千葉県八千代市高津字堀込1652番地外に所在する。

現状は畑地が主体で、一部宅地、荒地である。表面観察による土器片散布範囲は、約120000㎡に及び、字名では新山、堀込にわたるものである。かつては「新山遺跡」と称呼されていたが、新山、堀込の字名が市内に所在するため、遺跡名の混同をさけるため、高津新山遺跡とするに至っている。

八千代市は下総台地西部に位置し、印旛沼疎水として開析された新川と、それに合流する桑納(かんのう)川とによって、大きく3つの台地に区分される。そしてこれら台地もまた、複雑に樹枝状の谷津が入り込んでいる。水系は印旛沼へ流入する方向が殆んどで、東京湾に流入するものはきわめて少ない。

このような地理的条件のもとに、本遺跡は新川と花見川とが連なる萱田町付近より、南西に千葉市との市境に沿って入り込む谷津が、千葉市立柏井小学校辺にて、更に分枝して北西に侵入する谷津のや、奥まったところに所在する。この谷津に北面する台地上緩斜面に所在し、谷津は西側で西進するものと南下するものとに分枝する。

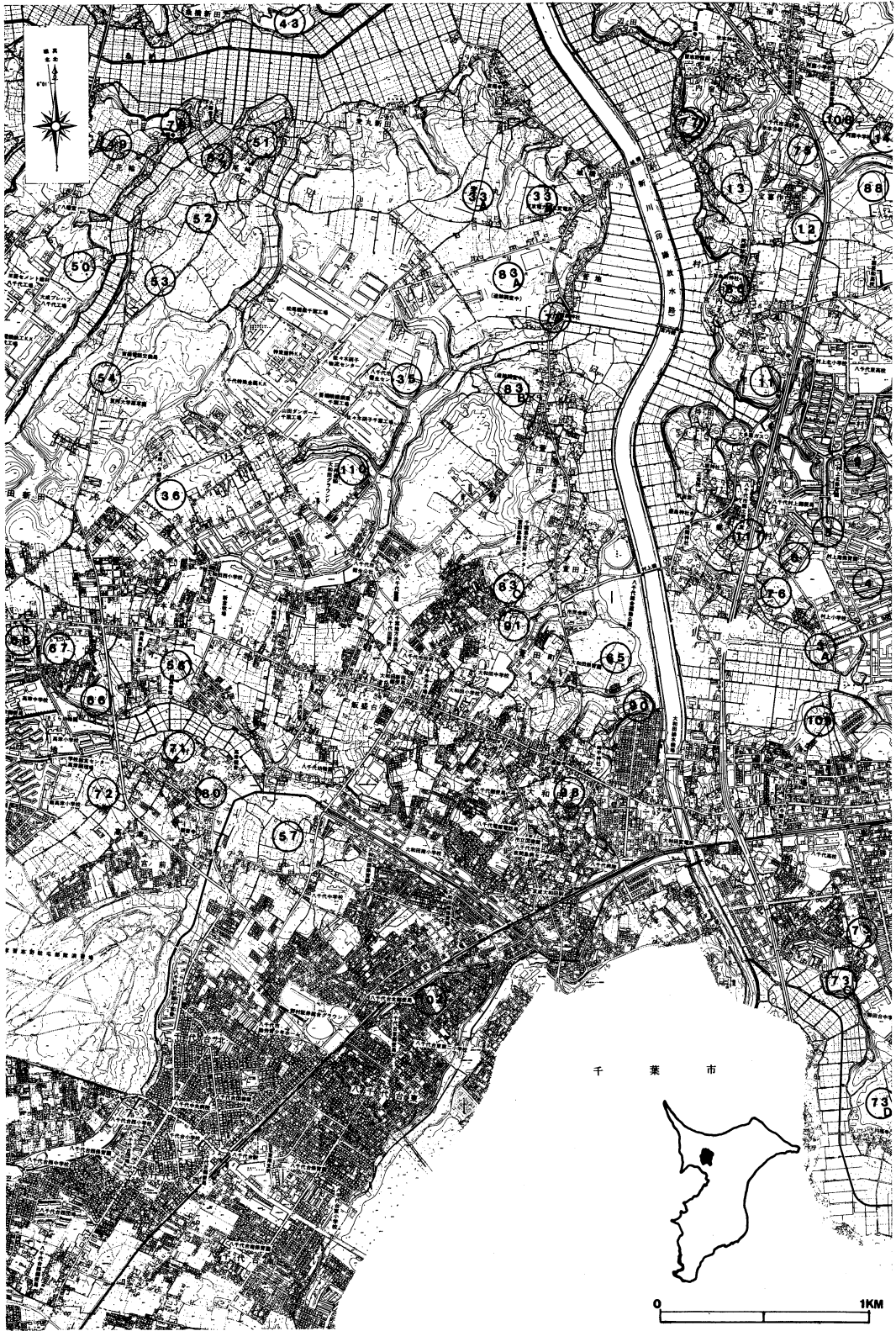
調査区中央に於いて、浅い谷津が入り込む台地である。標高は15~22mで、水田面との比高は1~8mである。

2 周辺の遺跡と歴史的環境 (第1図)

大和田、高津、八千代台地区においては、宅地造成等の開発は昭和30年代前半よりはじまっており、現在遺跡所在の確認もや、希薄な地区となっている。しかし周辺において先土器時代~江戸時代迄の遺跡が知られ、先人達の営みの痕跡が残こされている。これらを見ながら高津新山遺跡の歴史的環境を見てみよう。

先土器時代の遺跡としては村上遺跡群(4,5,6 註1)でナイフ形石器、ポイント等が検出され、萱田町川崎山遺跡(65・註2)池ノ台遺跡(91・註3)。向山遺跡(110)等で次第に先土器時代の姿が知られつつある。これらの遺跡からナイフ形石器、ポイント等の出土を見ており、また萱田遺跡群(83A・B・C・註4)においても出土している。

縄文時代については、周辺において住居址を伴う遺跡としてはまだあまり知られていないが、麦丸遺跡(33・早・後期)阿蘇中学校東側遺跡(14・中期)向山遺跡(110・前・中期)村上新山遺跡(88・註5)木戸前遺跡(68・註6)大溜入遺跡(102・前期)が知られている。



第1図 高津新山遺跡の位置と周辺の遺跡

弥生時代にあつては阿蘇中学校東側遺跡（註7）で弥生町・久ヶ原期の、村上遺跡群でも集落址と把握され、桑橋新田遺跡では方形周溝墓が検出されており、萱田遺跡群は調査実施中である。また出土する土器等より印旛・手賀沼系土器の文化圏に入っていたことも認められる。

古墳時代に入ると、村上第1塚群（3A・註8）勝田台古墳（73C）七百余所神社古墳（86、註9）根上神社古墳（76・註9）上の山古墳（90）が築造されている。根上神社古墳は市内で現存する前方後円墳である。

またこの時代の集落遺跡としては、萱田遺跡群や小板橋遺跡（98）池ノ台遺跡、萱田町川崎山遺跡が調査されており、特に滑石製模造品や未整品が出立している。

奈良時代、平安時代になると、村上遺跡群、辺田前遺跡（117）、萱田遺跡群、村上新山遺跡等が知られている。

中、近世の遺跡としては谷津をはさんで西側に高津館址（80・註10）や米本城址（77・註12）尾崎館址（82）吉橋城址（78）飯綱砦跡（79）が知られている。また特に本市の遺跡のあり方の特徴の一つであるが塚が数多く所在する。これらは村上第1塚群、向山塚群（36）、尾崎群集塚（53）米本塚群（75）勝田台塚群（73）庚塚（64）等である。

註1 千葉県都市公社「村上遺跡群」 1975年

註2 八千代市遺跡調査会「萱田町川崎山遺跡発掘調査報告」 1980年

註3 八千代市遺跡調査会「池ノ台遺跡発掘調査報告」 1980年

註4 千葉県文化財センター「千葉県文化財センター年報3」 1977年

註5 村上新山遺跡発掘調査団「村上新山遺跡発掘調査報告書」1980年

註6 木戸前遺跡発掘調査団「千葉県八千代市木戸前遺跡発掘調査報告」 1976年

註7 八千代市遺跡調査会「阿蘇中学校東側遺跡」 1980年

註8 八千代市 村上古墳群発掘調査団「八千代市村上古墳群」 1979年

註9 八千代市教育委員会「八千代市の文化財（パンフレット）」 1980年

註10 八千代市中世館城址調査団「八千代市中世館城址調査報告」 1976年

遺跡一覧

3 村上第1塚群 4～6 村上遺跡群 14 阿蘇中東遺跡 33 麦丸遺跡 43 桑橋新田遺跡
53 尾崎群集塚 57 高津新山遺跡 65 萱田町川崎山遺跡 68 木戸前遺跡 75 米本塚群
76 根上神社古墳 77 米本城址 78 吉橋城址 80 高津館址 82 尾崎館址 83 萱田遺跡群
86 七百余所神社古墳 88 村上新山遺跡 90 上の山古墳 91 池ノ台遺跡 98 小板橋遺跡
102 大溜入遺跡 110 向山遺跡 117 辺田前遺跡

（遺跡番号は八千代市遺跡台帳番号（1982. 2. 1 現在）である。）

第Ⅲ章 調査の概要と経過

1 調査の方法（第2図）

確認調査の方法は、グリッド発掘を基本として、一部グリッドを利用したトレンチを補助的に設定し、試掘を行った。この方法は、数度にわたる現地踏査と地形測量図をもとに検討し、決定したものである。

今回の対象面積が約50,000㎡と広く、効果的に遺跡を把握するためにはどうしたら良いかとの疑問点をもち、現地踏査を行った結果、土師器を使用する集団が主体となる遺跡と把握したためである。

調査区設定の基準線は、多角点測量により、東西・南北座標を出し、経距23.750、緯距-31.900の地点から真北に設定し、それを調査区基準線として、20m方眼を一区として設定した。東西を東から西へA・B・C～と、南北を1・2・3～と呼称名を設定し、交差した基本杭を20m方眼の呼称とした。またその中を5mグリッドを設定し1～16の番号をふった。

なお発掘の未承諾地もあり、承諾された所のみを調査した。また東西に20m毎の基準線に沿って南北にグリッド発掘を行ない、広い対象面積であるため、全体の傾向を把握することに主眼を置いた。

一部調査を実施した遺構はグリッド杭よりの方眼測量を行い、縮尺は $\frac{1}{500}$ を基準とし、単独で出土した一括土器については縮尺 $\frac{1}{250}$ に、全体の土層断面図は $\frac{1}{500}$ とした。

2 調査の経過

本遺跡の確認調査は、昭和56年12月2日より発掘調査を実施し、翌昭和57年2月27日に調査を終了した。今回の調査対象区50,000㎡のうち8,180㎡（16%）を試掘したことになり、発掘したグリッド数は448ヶ所であった。

検出した遺構は145基以上を確認し、第01号住居址及び第02号住居址については、遺構の調査を実施した。

なお確認調査を実施した対象区の殆んどが畑地であるため、調査終了後（3月）に埋め戻し作業を行う一方、出土資料の整理作業も実施している。

3 日誌抄

56年11月26日（木）

発掘調査準備のためグリッド設定の杭打ち作業に入る。また調査実施のために、耕作地の作物の有無を再確認する。表採活動を行う。

56年11月28日（土）

荒地については、雑草が立枯れているため、刈りとり作業に入る。グリッド設定の杭打ちを継続。

56年12月1日（火）

本日より発掘調査に入る予定であったが、雨のため延期する。調査員等は現地と地形測量図との比較、表採資料を参考にして調査実施における遺跡の検討を行う。

56年12月2日（水）

発掘作業に入る。S-9区より入る、S列が主体となる。ローム迄30~50cmで2層であった。まだ作物を収穫していない畑地もあり、当初は荒地より調査に入ることにした。遺構は確認できなかった。

56年12月16日（水）

P-12-1・2・3・4、Q-13-2・3グリッド発掘。ローム面迄30~50cmである。Q-13-2・3グリッドにまたがって黒色土落ち込み（土壌と後日認定）を検出する。土師器の甕破片の出土を主体とするものである。

56年12月18日（金）

S-7-2グリッドにおいて、縄文時代晩期終末の土器が出土した。縄文土器（前、中後期）の出土は調査区で散発的に出土していたが、晩期土器の出土で本遺跡の縄文時代の性格把握に再検討を要しよう。出土層は黒色土層で堆積は5cm内外で、より慎重な調査が必要となろう。

57年1月6日（水）

発掘調査を再開する。P-7区を中心とする。P-7-13グリッドで黒色落ち込みを確認。

57年1月8日（金）

P-7-14グリッドを発掘。昨日の黒色落ち込みのプランを確認するためである。住居址と確認する。

57年1月9日（土）

R-5-1グリッドを発掘。黒色落ち込みを検出。Q-4-16、Q-5-13、R-4-4セクションベルトの表土を除去し、プランを確認する。隅丸方形の住居址と認める。第01号住居址とした。

57年1月11日（月）

第01住居の発掘を開始する。（2月10日終了）。掘り込み浅く、焼土分布をかなり広い範囲でみとめる。図面は縮尺 $\frac{1}{10}$ とする。

57年1月12日（火）

第02号住居址の調査をはじめ。 （2月18日終了）

57年1月13日（水）

O-7-4、O-8-1グリッドにわたって覆土に貝層を有する住居址を検出する。第03号住居とする。確認面ではハマグリ等鹹水系の貝種が主体である。第03号住居南西50cm脇にも貝層を

有する土壌を検出する。

57年1月16日（土）

14区以降のL、M、N列を発掘に入る。土壌、住居址を次第に検出するグリッドが増える。

57年2月3日（水）

R-8-4、R-9-1・2・3・4、N-8-2・3、N-8-2・3、R-8-4、R-9-1・2・3・4グリッド等を発掘。耕作物の収穫の遅れで、発掘グリッドが調査区内で拡散する。

57年2月27日（土）

発掘調査を終了する。埋め戻し作業は3月に入ってから行うこととする。

4 高津新山遺跡の層序（第3図・図版2）

本遺跡は台地北側の緩斜面に立地しており、北東から進入する谷によって台地は大きく割られている。谷に近いところでは傾斜がやや大きくなるが、土層の堆積状況には全体的に大きな変化はない。ただし、谷の落ち込みと他の傾斜地とでは堆積の状態は異なりを示している。

さて、本遺跡の層序であるが色調で把握、基本的に緩斜面で2層ないし3層、谷の落ち込みでは8層に分けた。

第1層は暗褐色土層である。粘性は弱く、しまりも悪い。遺跡が畑地に所在するため、第1層は耕作土である。厚さ30cm～70cmで堆積している。

第2層は黒褐色土層である。粘性は弱く、しまりも悪い。第1層が斑点状に混入しており、焼土微粒を若干包含する。

第3層は黒色土層である。粘性は弱いがしまりの良い腐蝕土層であり、炭化粒、焼土粒などを若干混入している。この層と第4層との境に於いて縄文土器片が出土する。

第4層は暗褐色土層である。色調は第1層に比べると黄色味がかっており、粘性をやや帯び、しまりも良い。

第5層は黒褐色土層である。粘性を帯び、しまりの良い緻密で均一な層である。

第6層は暗い黒色土層である。この層も粘性を帯び、しまりの良い緻密で均一な層である。

第7層はローム漸移層である。本遺跡ではこの層からポイントを出土している。

第8層はローム層であり、軟質ロームと硬質ロームとに分けられる。

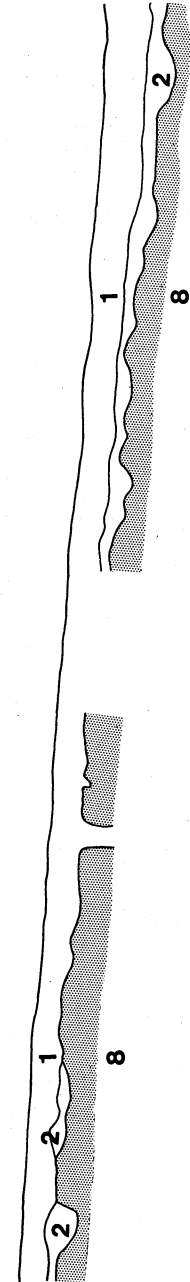
第3図は南北の土層図であるが、緩斜面（P-6-3、P-6-4、P-15-4、P-16-1グリッド）及び谷への落ち込み（P-9-4、P-10-1グリッド）の位置を標準に示した。

L. 20.00M

P-16-2

P-15-4
L. 2000M

P-16-1



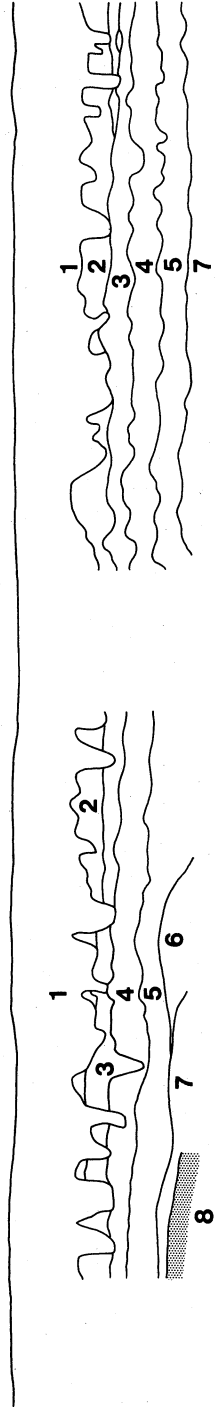
| 8 |

L. 17.00M

P-10-2

P-9-4
L. 1700M

P-10-1



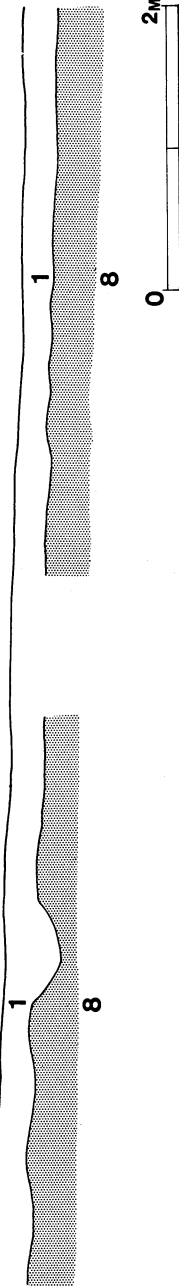
L. 16.50M

P-7-1

P-6-4

P-6-3

L. 16.50M



第3図 高津新山遺跡の土層

土層凡例

- | | | |
|-----|--------|----------------------|
| 第1層 | 暗褐色土層 | 耕作土 |
| 第2層 | 黒褐色土層 | 粘性は弱く、しまり不良、焼土微粒若干包含 |
| 第3層 | 黒色土層 | 暗褐色土斑点状に混入 |
| 第4層 | 暗褐色土層 | 粘性は弱く、しまり良い、焼土微粒若干包含 |
| 第5層 | 黒褐色土層 | 色調やや赤味を帯びる |
| 第6層 | 黒褐色土層 | 粘性をやや帯び、しまり良い |
| 第7層 | 漸移層 | 粘性を帯び、しまり良い、微密・均一な層 |
| 第8層 | ソフトローム | 粘性を帯びしまり良い均一な層 |

第Ⅳ章 遺構及び遺物

本遺跡において検出、確認された遺構は総数145基で、遺構別に示すと竪穴住居址34軒、掘立柱穴列5軒、土壇92基、溝状遺構18条であった。

これらのうち住居址は、S-4区よりQ-9区を経て、O-12区辺に入る浅い谷の周辺に多く検出された。むしろ谷頭付近ではこの谷に落ちはじめる辺に多く、台地中央から先端部では西側に検出主体を置く。

土壇は住居址所在グリッド等と混在する一方、や、標高の高いグリッドで確認された。掘立柱穴列は、調査区南西のT、V-17区に所在する。

遺構は、標高が高くなる台地上には確認されず、むしろ谷に下る傾斜地に所在する傾向を示した。

出土する遺物は、先土器時代の石器や剥片から、縄文時代の土器、奈良～平安時代の土師器、須恵器まで長い期間にわたる。

また近世、近代の陶磁器類も含めると、より一層長い年月にわたって、本遺跡が形成されたことを物語る。

1 第01号住居址（第4図・図版3）

本住居址は調査区北側の台地先端に所在し、Q-4-16、Q-5-13、R-4-4、R-5-1グリッドにわたって検出された。耕作土が非常に薄い（20～30cm）ため、住居址上部は殆んど削平され、遺存状態は不良であった。

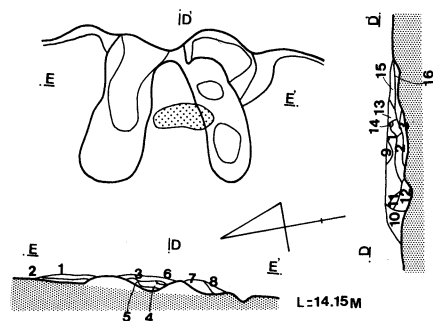
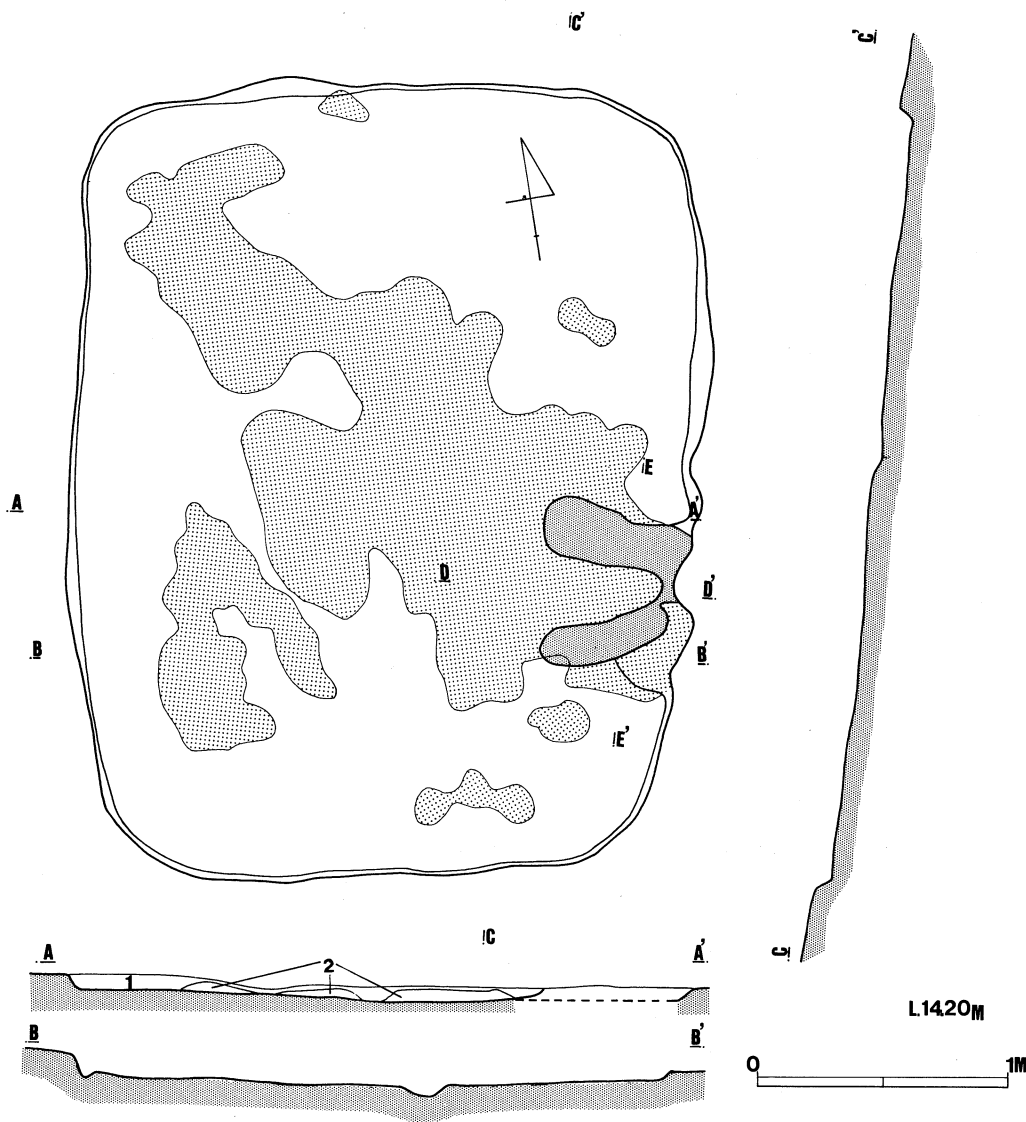
プランは隅丸方形で、大きさは中軸線で計測して、南北3m15cm、東西2m54cmを測り、いく分南北が長いものである。主軸はE-8-Nである。

住居址内の堆積土層は2層で、暗褐色土と赤褐色土（焼土）と把えた。住居址の確認面は、ソフトローム層であり、ソフトロームをわずかに掘り込んで床としている。壁高は平均7cmである。床の状態はカマド周辺でわずかに硬度を持つが、その他の大半はきわめて軟弱であった。

周溝及び柱穴については、住居址内及び外側周囲を精査したが検出できなかった。カマドは東壁に設けられていた。

また第4図にスクリーンで図示したように、焼土が堆積していた。また床面は焼土が混じり合う状態であり、小炭化物も散布しており、火災にあった住居と思われる。

本住居址から出土した遺物は極めて少なく、土師器の甕破片が9片であり、実測するに至らなかった。



第4図 第01号住居址実測図

土層凡例

- 第1層 黒色土層 しまりのない砂質の層焼土、炭化物含む
- 第2層 赤色土層 焼土との混合層

カマド土層凡例

- | | |
|--------------|----------------|
| 第1層 黒褐色土層 | 第9層 暗褐色土層 |
| 第2層 暗褐色土層 | 第10層 暗褐色土層 |
| 第3層 黒褐色土層 | 第11層 暗褐色土層 |
| 第4層 暗褐色土層 | 第12層 黒色土層 |
| 第5層 暗褐色土層 | 第13層 黒褐色土層 |
| 第6層 赤色土層(焼土) | 第14層 暗赤色土層(焼土) |
| 第7層 褐色土層 | 第15層 暗灰色土層 |
| 第8層 暗褐色土層 | 第16層 暗褐色土層 |

第01号住居址のカマド（第4図・図版3）

住居址東壁の中央よりやや南寄りに構築されていた。先述した住居址同様、攪乱が激しく、遺存状態は不良で、かろうじてそでの基礎が残っているにすぎなかった。

カマド付近の堆積土層は、遺存状態が不良であることもあって、細分して把えた。第6層赤色土は焼土塊であるが、カマド内の堆積土からみると浮いており、火床とは認められない。

カマドを構築するにあたり、ピットは認められず床面と同レベルで営んでいる。

カマドの基礎は白色粘土（砂質）とローム、暗褐色土とを混合したものである。右そではロームが削られずに残っており、そこに白色粘土との混合土を盛りあげる形となる。

これからみると、カマドの位置は住居址を設けた当初から決めていたと考えられる。

2 第02号住居址（第5、6図・図版4、5）

本住居址は調査区北側中央の、P-7-14・15グリッドにわたって検出された。S区より台地に入り込む浅い谷の西側に位置し、ローム層が谷津に向かって落ちはじめるところに所在した。

プランは隅丸方形で、大きさは中軸線で計測すると、南北3m 2cm×東西2m 95cmを測かる。主軸はN-2°-Eである。幾分北側に広がる形状となる。

住居址内の堆積土層は9層と把え、次のようになる。

第1層 黒色土層 粒子細かく粘性はない、焼土粒、ローム粒を含む。

第2層 暗褐色土層 粒子やや粗く、焼土粒、ローム粒もやや多い。

第3層 黒褐色土層 1層に近似するが、焼土粒、ローム粒が多い。

第4層 暗褐色土層 ローム粒を多量に含む。

第5層 暗褐色土層 色調暗く、ローム粒を多量に含む。

第6層 暗褐色土層 ロームがやや多く混入。

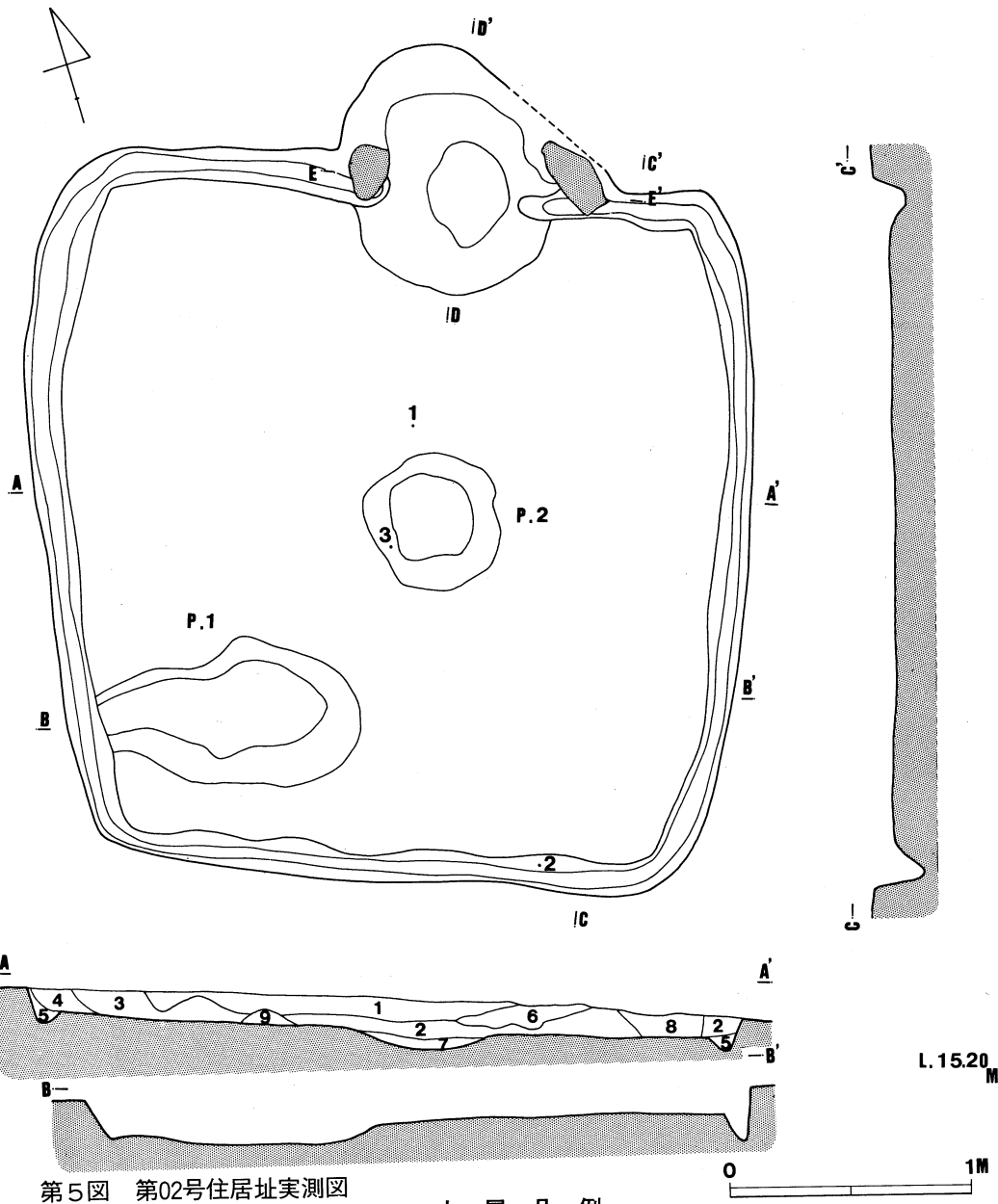
第7層 暗褐色土層 焼土粒、ローム粒を多く含む層。

第8層 暗褐色土層 攪乱層である。

第9層 褐色土層 ローム粒を多量に含んだしまりのよい層

住居址を確認した面はソフト・ローム層上部であり、これを掘り込んで床としている。床からの壁高は、平均10cm内外を測かる。幾分床は谷に向かって傾斜しており、壁高も東側で浅くなる。床の状態は、カマド周辺及び北東コーナーで硬度を有しはっきりしたものであるが、他は軟弱である。床面には小炭化物が、密着した状態で散布している。

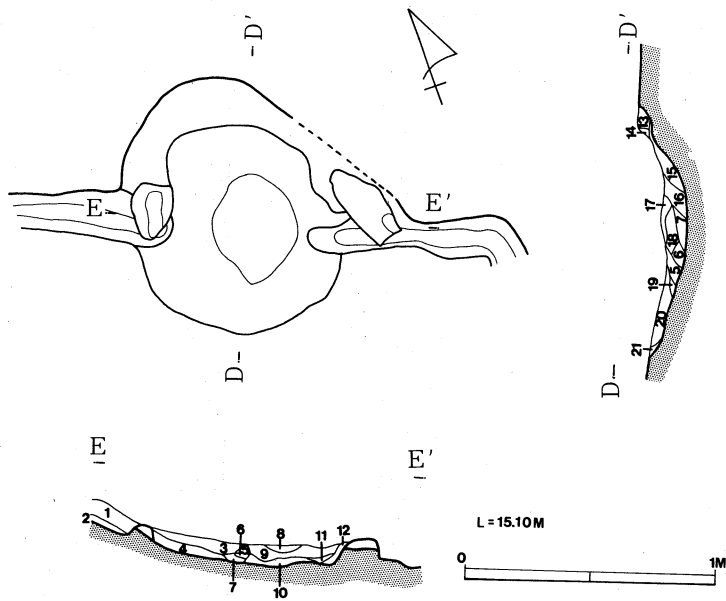
カマドは北壁に構築され、周溝はカマドのそで下より全周し、床から平均12cm掘り込まれている。柱穴は住居址内外を精査したが、確認できなかった。



第5図 第02号住居址実測図

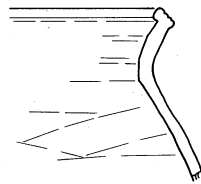
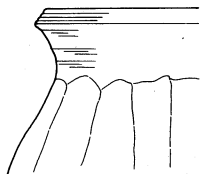
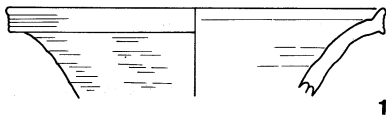
土層凡例

- | | | |
|-----|-------|------------------------|
| 第一層 | 黒色土層 | 粒子細かく粘性はない、焼土粒、ローム粒を含む |
| 第二層 | 暗褐色土層 | 粒子やや粗く、焼土粒、ローム粒もやや多い |
| 第三層 | 黒褐色土層 | 1層に近似するが、焼土粒、ローム粒が多い |
| 第四層 | 暗褐色土層 | ローム粒を多量に含む |
| 第五層 | 暗褐色土層 | 色調暗く、ローム粒を多量に含む |
| 第六層 | 暗褐色土層 | ロームがやや多く混入 |
| 第七層 | 暗褐色土層 | 焼土粒、ローム粒を多く含む属 |
| 第八層 | 暗褐色土層 | (攪乱層) |
| 第九層 | 褐色土層 | ローム粒を多量に含んだしまりのよい層 |

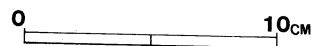


カマド層凡例

- 第1層 暗褐色土
- 第2層 暗褐色土
- 第3層 黒褐色土
- 第4層 暗褐色土
- 第5層 黒褐色土層(焼土砂)
- 第6層 赤色土層(焼土)
- 第7層 暗褐色土層
- 第8層 暗褐色土層
- 第9層 黒褐色土層
- 第10層 暗褐色土層
- 第11層 暗褐色土層
- 第12層 暗褐色土層
- 第13層 黒色土層
- 第14層 黒褐色土層
- 第15層 暗褐色土層
- 第16層 暗褐色土層
- 第17層 黒褐色土層
- 第18層 黒褐色土層(焼土砂)
- 第19層 暗褐色土層
- 第20層 黒色土層
- 第21層 黒褐色土層



第6図 第02号住居址のカマドと出土の遺物



本住居址には、2つのピットが営まれている。P.1は床面から－9cmで、覆土は焼土との混合層である。P.2は床面から－8cmで、スリ鉢状のものである。P.2には床面レベルから外周にかけて焼土が散布しており、また砥石が出土した。

遺物はカマド前及び北東コーナーで、主として出土した。

第02号住居址のカマド

住居址北壁の中央よりやや東寄りに構築されるが、攪乱を受け遺存は不良で、そでの一部が残っているにすぎない。

カマドを構築するにあたって、スリ鉢状にピットが掘り込んであり、上場で南北1m1cm×東西84cmを測かる。

堆積土層は細分化して把えたが、焼土が塊状に認められるのみで、明瞭な火床はみとめられなかった。

そでは先述したとおり、一部が残っているのみであった。掘り込んだピットの立ちあがりから、砂質粘土と混合したそでが伸びる。

第02号住居址の遺物

本住居址から出土した遺物は、砥石1点以外は全て土師器破片であった。甕が殆んどであり、坏は少ない。出土傾向はカマド周辺及び北東コーナーが最も多く、全体的には東寄りの出土が多い。

復原できるものは少なく、図示したのみである。

1は土師器の壺で、口径15.0cm、現存高3.6cmを測かる。ていねいなナデ整形であるが、もろい土器であった。

2は土師器の甕で、口径21.1cm、現存高は6.5cmを測かる、胴部はヘラ削りで、口縁は横ナデである。

3は砥石でP.2から出土した。幅3.9cmで、大部やせたものとなる、もろくなっているものである。

グリッド出土の遺物

先土器時代の遺物（第7図・図版7）

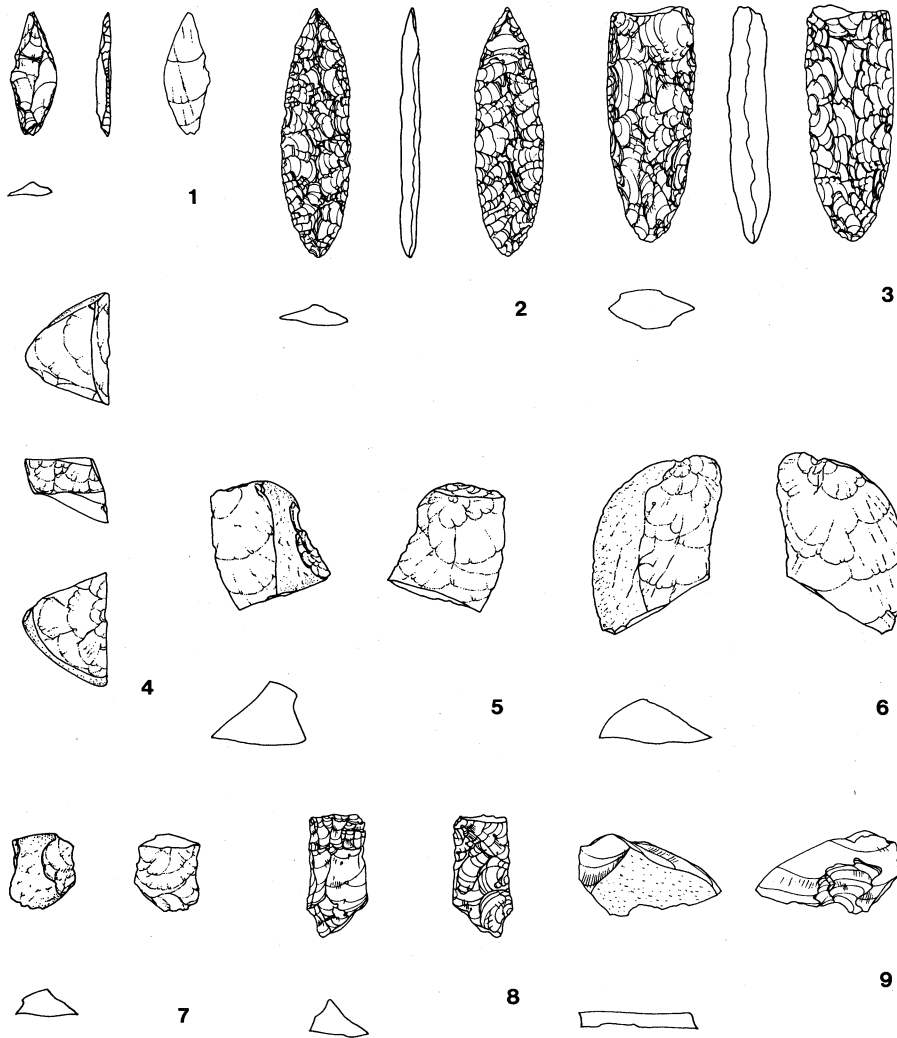
先土器時代の遺物は、剥片の散漫な分布がみられる地点が1ヶ所検出された他は、ナイフ形石器1点と尖頭器2点が、それぞれ単独で出土したにとどまった。

ナイフ形石器. (1) 頁岩を素材とする小形のナイフ形石器で、先端をわずかに欠失するだけで、ほぼ完全なものである。刃潰し加工は、右側縁では全面に、左側縁では基部から身の中央部まで行なわれているが、主剥離面にはまったく手が加えられていない。ナイフ形石器でも比較的新しい時期に位置づけられるものと考えられる。

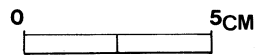
尖頭器. (2,3) 2は1のナイフ形石器から約30m離れた地点から出土したチャート製の木葉形尖頭器で、裏面の先端部に、わずかに主剥離面を残すだけで極めて入念な調整が施こされている。特に裏面の基部近くでは、縞状の平行する剥離が見られる。これはローム漸移層中の出土であるが、出土地点がゆるやかな傾斜面の下方に位置しているため、さらに上部の地点から流れてきた可能性が強い。3は発掘区域東南部の地点から単独で出土したチャートまたは頁岩製と思われる比較的肉厚に作られた木葉形尖頭器で、やや反りぎみの身の中央部から先を欠失している。調整加工は、2に比べてかなり粗雑である。この2点の尖頭器はその形態から、先土器時代から縄文時代初頭の時期に位置づけられるものと考えられる。

剥片 (4~9) いずれも発掘区域東部の比較的比高の高い地点から出土したもので、安山岩及び黒曜石を素材としている。4は安山岩製の打面調整剥片で、剥片剥離作業の痕が側面に残っている。5は背面に自然面を残した剥片で、打面には打面調整が行なわれ、側縁部には主剥離面からの複数の剥離痕がみられる。6も背面に自然面を残した剥片で、打面が極めて小さく、打面調整の有無は不明である。7は自然面を大きく残した剥片で、打面調整は行なわれていない。5~7はいずれも安山岩を素材としたものであるが、どの剥片も一部に自然面を残すところから、剥片剥離作業の比較的初期の段階で作り出されたものと考えられる。8は不純物を含む透明度の低い黒曜石を素材とし、主剥離面に一方の側縁から加撃を加えて刃部とし、削器として使用されたものと考えられる。9は8よりも純度の高い黒曜石から剥ぎ取られた剥片で8とは母岩が異なっている。

これから4~9の遺物が出土した地域は、表土層が極端に薄く、耕作による攪乱がソフトローム中にまで及んでいるため本来のソフトロームの堆積の状態を観察できる地点はなかったが、ハードロームとの境近くから発見された遺物もあることから、今後の調査によってはさらに下層から、石器が検出される可能性も残されているといえよう。



第7図 先土器時代の遺物



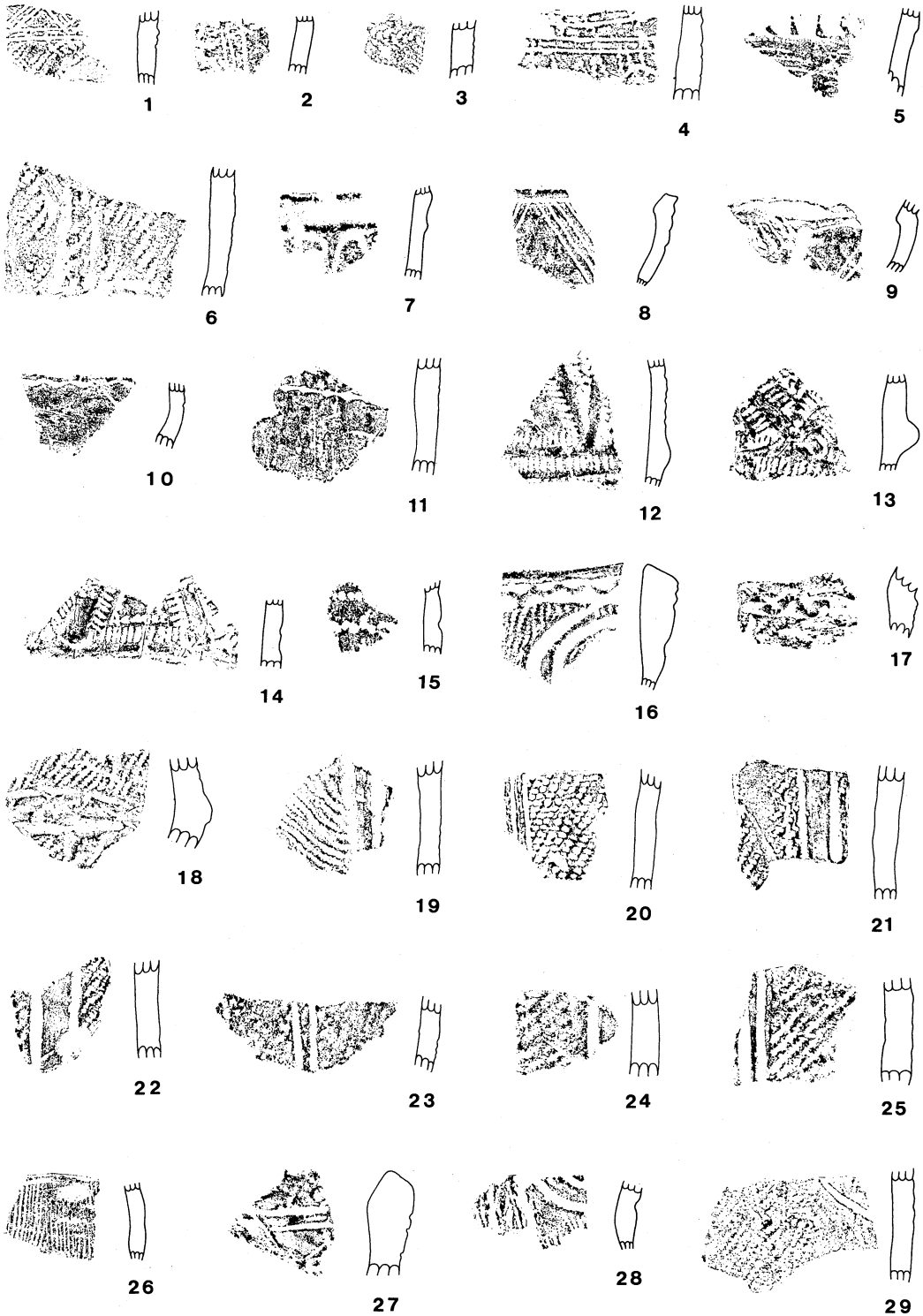
縄文時代の遺物 (第8、9図・図版8、9)

第1群土器 胎土中に繊維を含む焼成不良の土器で、1は縄文を地文とし半截竹管による平行沈線と押し引きによって鋸歯状文を描き、内面は入念な器面調整が行なわれている。2は浅い沈線を縦に3本引いた土器。3は羽状縄文を横位施文した土器で、1・2は前期前半の黒浜式土器に属すると考えられる。

第2群土器 貝殻腹縁と竹管を用いる文様が描かれた焼成の比較的良好な土器で、4は貝殻腹縁による鋸歯文を地文に施こし、半截竹管による平行沈線を横位に加えたもの。5は横位の貝殻腹縁文に竹管による連続刺突が行なわれたもので、いずれも前期後半の浮島・興津系に属する土器であり、4のように鋸歯文が比較的大きいものはその中でも後半のものに該当すると考えられるが、わずか2片の小破片のため正確な位置づけは困難である。

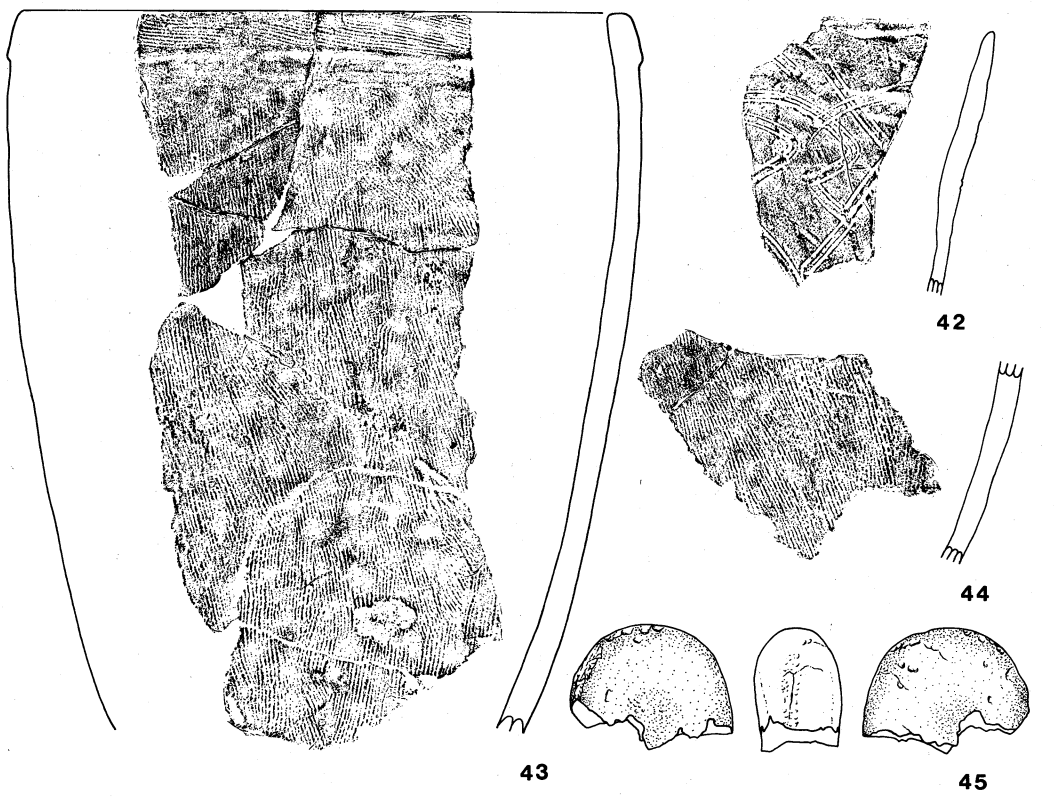
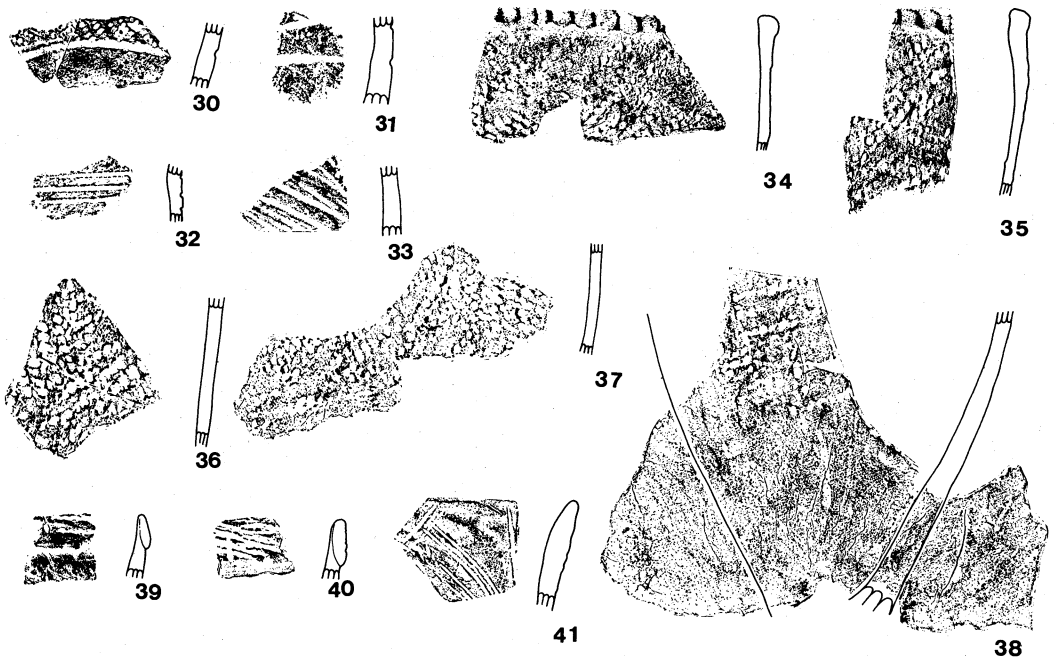
第3群土器 中期初頭から前半にかけてのものを一括する。6は胎土中に石英粒を多量に混入した焼成の良好な大形の土器で、体部に粘土紐を縦に貼り付け、その上から短かい縄文の原体を縦に数条回転させている。7は角ばった粗大な石英粒や雲母を多量に混入する焼成の極めて悪い土器で、2本の平行に巡らした隆線の下に結節沈線による曲線がアーチ状に描かれている。8・9は同一個体に属すると思われる土器で、砂粒を多く含みながらも内外面ともに入念なヘラ磨きを加えられ焼成も良好で、ゆるく内弯する口縁部に、くの字形に外反する口唇部がつき、口唇上には浅い刻み目が施こされ帯状の口縁部には結節沈線により鋸歯状文が連続して描かれている。10は雲母を含む薄手の土器で、沈線により連続した屈曲文が引かれている。12~14は胎土器面調整などから同じ個体と考えられる土器で、器面を菱形に区画するような貼り付け隆帯が施こされ、その隆帯にそって幅広のヘラ状工具による連続する刺突の行なわれるいわゆるキャタピラ文の見られる土器である。これら3群土器の中で6~9の土器については中期前半の阿玉台系の土器の成立する前段階に位置づけられると考えられる土器で、一部には阿玉台の要素もうかがえる。また12~14の土器にみられるキャタピラ文は中期中葉の勝坂式土器を特徴づける文様要素の1つで、勝坂式土器の中でも古い勝坂式に多用されるものである。

第4群土器 中期後半加曾利Eに属する土器群で高津新山遺跡の中で出土数の比較的多まっているものだが、そのほとんどが細かな破片であり、また出土する層も耕作による攪乱土か台地の中にはいり込んだ浅い谷を埋めた土の中からの出土であった。16は砂粒を多量に含んだ器面調整のあまり行なわれていない大形の土器で斜めに削がれた口縁にそって連続する交互刺突が加えられ、その下に幅広の沈線による曲線文が描かれている。同じく17は頸部の屈曲部に隆帯を巡らせ16同様に交互刺突を連続して施こしたものである。18はキャリパー形の土器の口縁部の破片で、口縁と体部とを区画している隆帯が著じるしく退化している。19、21~25は体部に口縁部から垂

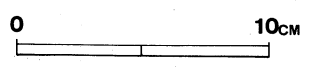


0 10cm

第8図 縄文時代の遺物 (1)



第9図 縄文時代の遺物 (2)



下する沈線によって区画される磨消縄文が施こされる土器で地文となる縄文は複節のものが多い。しかし中には20のように垂下する沈線のみが引かれ磨消しが行なわれないものもある。26は褐色のや、薄手の土器で、全面に縦の櫛描文が施こされている。このうち16、17は交互刺突が加えられているところから、加曾利E I 式の中でも比較的古く位置づけられるものと考えられるが18～26に関しては18の土器に見られる口縁部文様帯の退化や磨消縄文などの特徴から加曾利E II 式の新しい部分からE III 式にかけての土器と考えられる。

第5群土器 後期前半に属するもので27は肥厚する口縁部に2本1組の沈線が描かれる。29は短い原体を縦回転し曲線を引いたものである。

第6群土器 後期中葉の加曾利B の範疇に属すると思われるもので、30～33は精製または半精製、34～38は粗製土器である。30、31は磨消縄文が施こされるもので、30では比較的粒の大きな原体が用いられ表裏ともに入念な器面調整がおこなわれている。32は2本の沈線の上下に細かな縄文が施こされ、右上部には焼成前にあけられた円い孔がある。34～38の土器は同一個体の可能性の強い土器で粗製とはいえ器壁は薄く焼成も良好なものである。34、35の口縁部では口唇部に粘土紐を貼り付け、その上を棒状の工具によって押圧し内面には浅い沈線が一本引かれている。地文には燃りのゆるい粗大な縄文が不規則な方向に回転施文されている。この土器は口唇部の貼り付け隆帯の特徴と内面の沈線の存在から加曾利B I 式に属する粗製土器と考えられる。

第7群土器 晩期に属すると思われるものを一括する。39、40、43は複合口縁を有するもので擦糸文が口縁部では横に、体部では縦にそれぞれ施文され、複合口縁の直下ではヘラ状工具によって擦糸を磨り消し、無文帯を形成している。43は口径約23cmの大型の深鉢形土器で内面は口縁部から10～12cmくらいの間は横、それ以下では縦に入念なヘラ磨きが行なわれている。これら39、40、43のように複合口縁を持ち擦糸文を施文した粗製土器は東北地方の縄文晩期大洞C₂式からA・A'式の時期に対応する関東地方の土器に共通してみいだされるものである。41、42は同一個体と考えられる鉢形土器で開きぎみの口縁にや、尖った口唇がついている。内外面共に口縁部には横方向、体部には縦方向の顕著なヘラ削りの痕がみられ、表面にはさらにそれより浅いハケ目調整が加えられている。半截竹管を使用したと思われる平行沈線によって曲線と直線を組み合わせる幾何学文を描く。この土器は40、43に近い地点で出土し、器面調整にハケ目を用いることや、文様を沈線によって描くことなどから晩期の中にも含めたが、文様のモチーフは他の晩期の土器に類似するものがなく、再考を要する資料である。

石 器

発掘によって得られた縄文時代の石器は45の磨石が1点あるだけで、他はメノウ・チャートの剝片が散漫に出土しただけであった。磨石は砂岩の礫をそのまま使用したもので側縁のほぼ全面にわたって使用痕が見られ、一部には火をうけた痕跡がある。

グリッド出土の土師器・須恵器（第10、11、12図・図版10、11、12）

確認調査において出土した遺物の主体は、土師器、須恵器の破片であった。器形としては甕・坏・皿・甑などであり、時期的には、古墳時代後期のものから、平安時代のものであった。

出土地点は、古墳時代後期のものは、U・V-17区に主体を置くが、いずれも遺存度は悪い。奈良時代は、M・N・O-14区に多かった。しかし、この両者は、量的にそれ程多くはない。平安時代の土器破片は遺跡全体にわたって出土しており、遺存度の良好なものもある。

1は土師器の甕で、口径14.9cm、現存高4.2cmを測り、胴上半の遺存である。胴部は、縦のヘラ削り整形を、口縁は横ナデ、内面もナデを施す。P-13-3グリッド出土である。

2は土師器の甕で、口径17.8cm、現存高6.1cmを測り、遺存は口縁部 $\frac{1}{4}$ である。色調は褐色で、胎土は密で、焼成は普通である。M-8-2グリッドの出土である。胴上半は縦のヘラ削り整形で、口縁は横ナデを施す。

3は土師器の甕である。M-8-2グリッド内の北壁にカマドを持つ住居址の、カマド最上層の出土である。口径は17.0cm、現存高は7.8cmを測る。胴上半はヘラ削り整形で、口縁は横ナデ、成形痕を残すものである。

4は土師器の甕で、L-14-3グリッド出土である。住居址カマド出土であるが、耕作土によって殆んど攪乱を受けており、カマド火床と床面が残るのみである。カマドは、東壁である。胴部はヘラ削り整形後、ヘラナデを施す。内面頸部は指頭による押さえで整形する。口径19.4cm、胴最大径は21.0cm、現存高は15.4cmで、胴下半はないが、今回の調査においては遺存の良好な土器である。

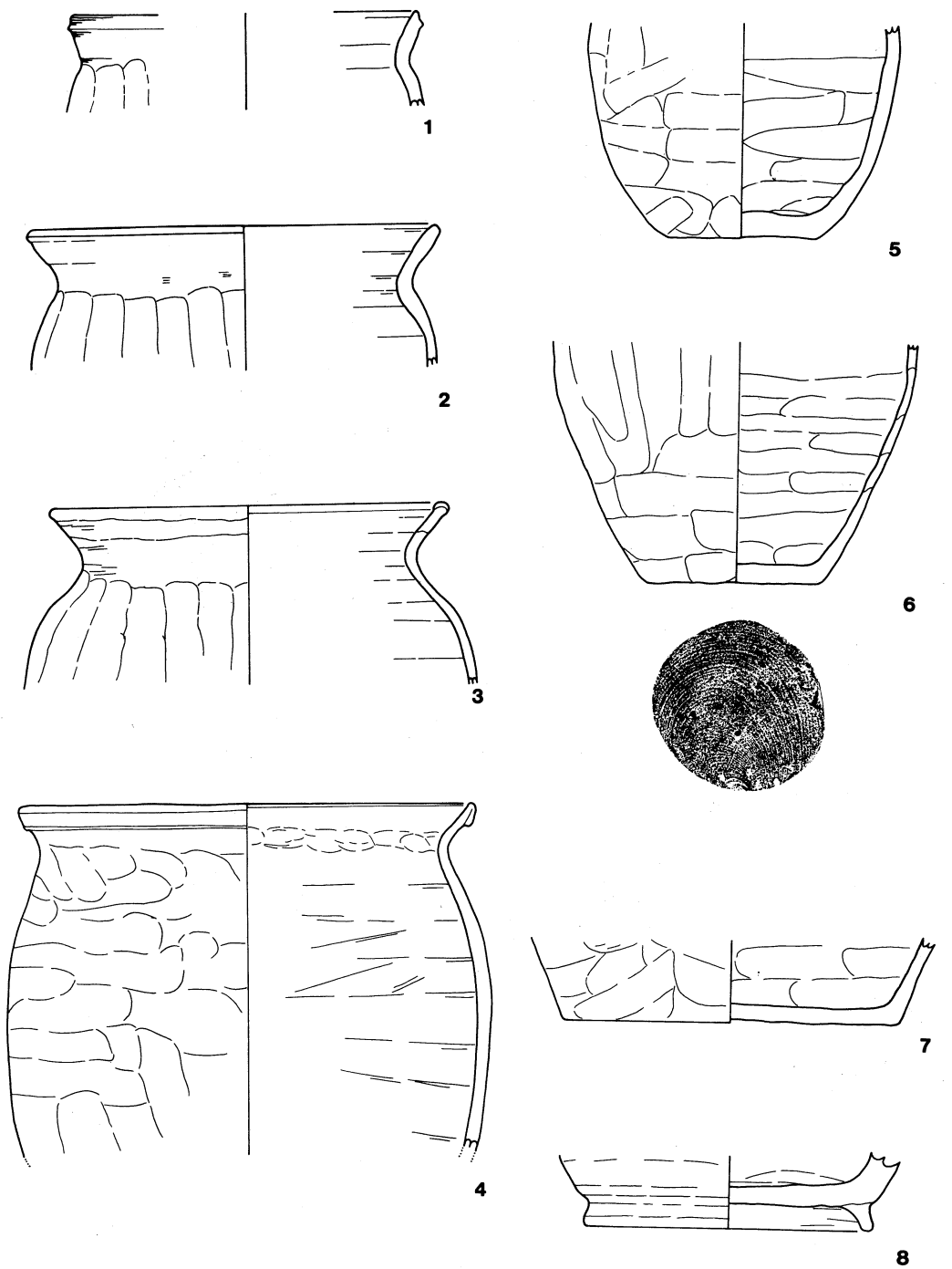
5は土師器の甕で、底形で6.7cm、現存高9.4cmを測る。底部及び胴下半はヘラ削り整形で、内面はヘラナデを施す。や、砂質の土器である。L-14-3グリッド、第1層の出土である。

6は土師器の甕で、底径は7.4cm、現存高10.6cmを測る。底部は回転糸切りで、胴部は下半は横の、中位は縦のヘラ削り整形を施すもので、内面はヘラナデである。L-14-3グリッドの出土である。

7は須恵器の甕である。底径14.5cm、現存高3.6cmを測る。荒いヘラ削り整形を行い、色調は淡青灰色である。L-6-1グリッドの出土である。

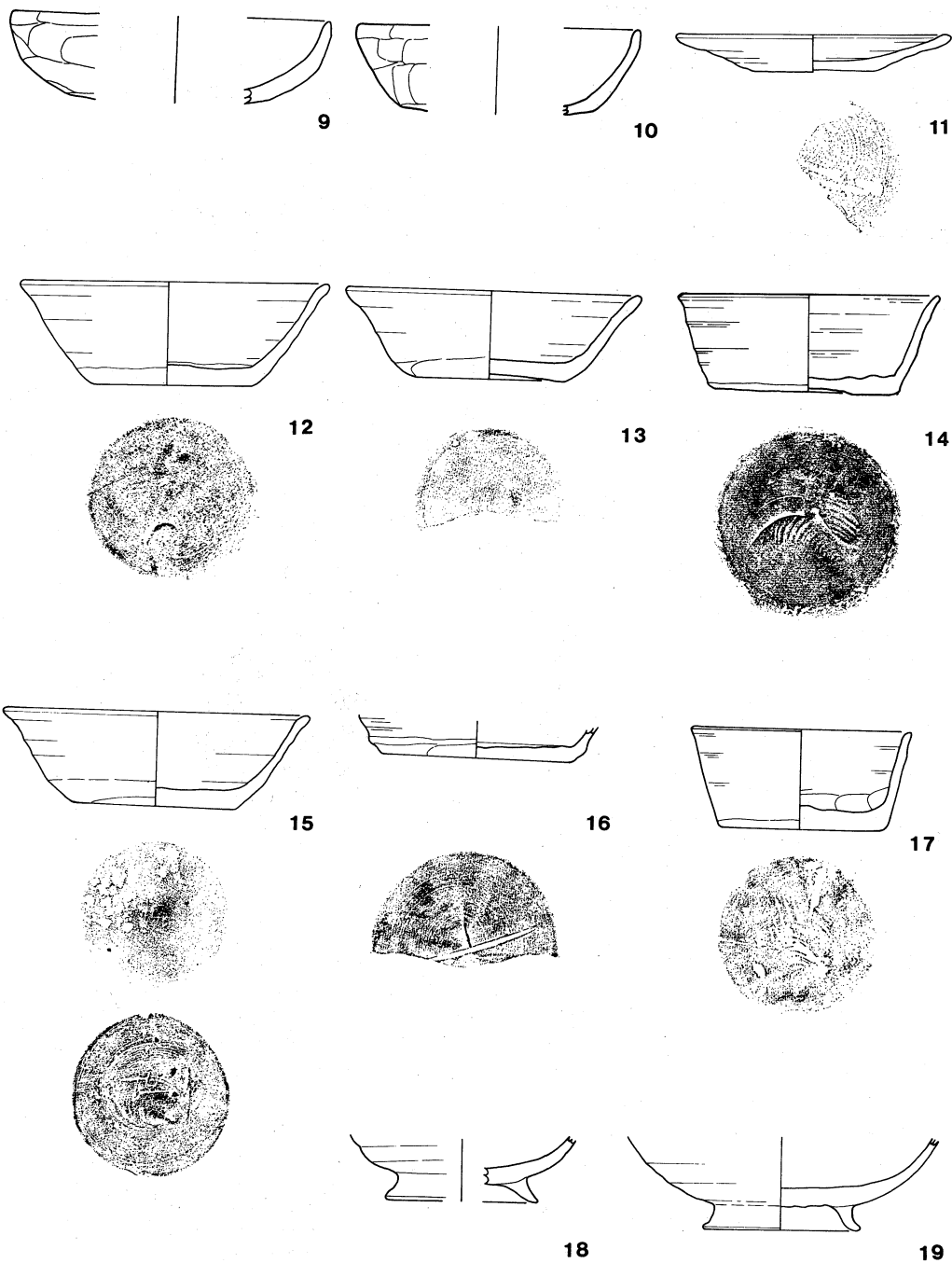
8は須恵器の高台付坏で、高台は貼付けである。底径は12.4cmを測る。焼成は良好で、色調は青灰色である。O-12-2グリッドの出土である。

9は土師器の坏で、底部をあまり意識せず、ヘラ削り整形後、口縁に横ナデを施す。口径13.6cmである。口縁は直立する。内面はヘラ磨きを施す。や、砂質の土器で、M-14-2グリッドの出土である。



第10図 グリッド出土の土師器、須恵器（1）

0 10cm



第11図 グリッド出土の土師器、須恵器 (2)

0 10cm

10は土師器の坏である。口径は12.0cm、底径は8.4cm、現存高は3.7cmを測る。いく分底部を意識する。底部はヘラ削り後、弱いヘラ磨きをし、体部下半はヘラ削り整形、体部上半から口縁はヘラ削り整形後弱いヘラ磨きである。M-14-3グリッドの出土である。

11は土師器の皿で、口径11.6cm、底径5.0cm、器高は1.6cmを測る。底部は回転糸切りで、体部はロクロ痕を残す。L-14-2グリッドの出土である。

12は土師器の坏で、口径13.0cm、底径6.8cm、器高4.4cmを測る。底部は回転ヘラ起こしで、体部はロクロ痕を残す。遺存度は良好であるが、表面の剝落は顕著である。L-15-1グリッド出土である。

13は土師器の坏で、口径12.4cm、底部6.3cm、器高3.8cmを測る。ロクロ引きの後、底部はヘラ削りされ、一部ナデを施される。体部底縁はヘラ削りされる。M-14-2グリッドの出土である。

14は土師器の坏で、ロクロ引き後、体部底縁はヘラ削り。底部は回転糸切り後、ヘラ削りを行う。口径11.2cm、底径7.5cm、器高4.3cmを測る。N-15-3グリッドの出土。

15は土師器の坏で、口径12.9cm、底径6.9cm、器高4.0cmを測る。ロクロ引き後、体部底縁はヘラ削りを行う。底部は回転糸切り後に、回転ヘラ削り調整を行う。底部及び内底面に「堤」の線刻がある。K-15-1グリッドの出土である。

16は土師器の坏の底部で、底径は8.1cmを測る。ロクロ引き後、底部はヘラ削り調整を行う。また1条の沈線が刻まれる。R-11-3グリッドの出土である。

17は土師器の坏で、口径9.3cm、底径6.8cm、器高4.3cmを測る。ロクロ引き後、底部は糸切りし、ヘラ削り調整を行う。体部は直立に近づいている。R-11-3グリッドの出土。

18は土師器の高台付坏で、器形は壺に近い。高台は貼付けで、体部はナデで、内面はヘラ磨きを施される。T-6-16グリッドの出土である。

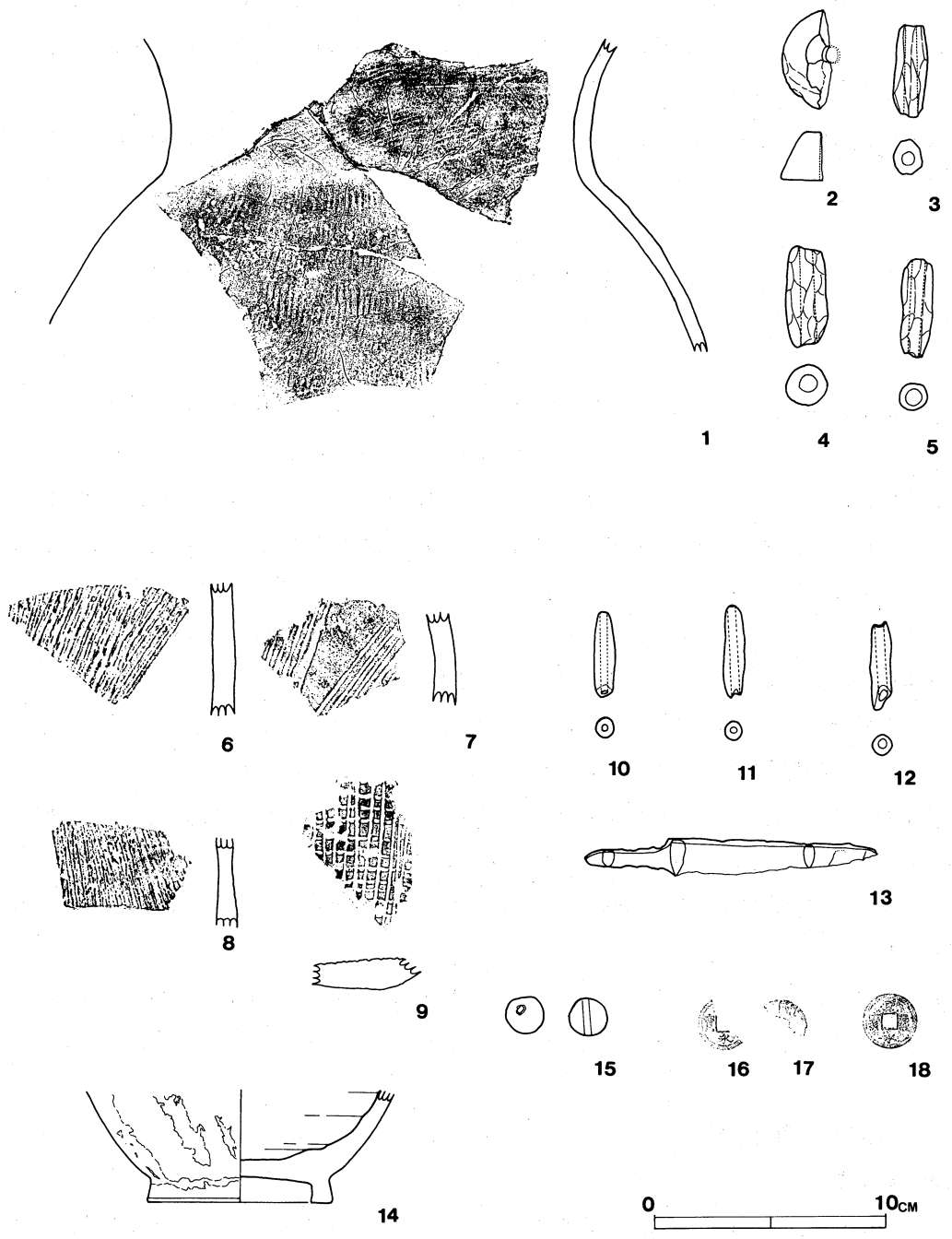
19は土師器の高台付坏で、器形は壺に近いものである。高台は貼付けで、内面はヘラ磨きである。P-10-1グリッドの出土。

第12図1は土師器と須恵器の中間を示すもので、壺である。頸部 $\frac{1}{4}$ の遺存で、横ナデの後に叩き目が施される。内面はヘラナデ後、横ナデが施される。N-14-2グリッドの出土である。

その他の遺物 (第12図)

紡垂車 (第12図2)

T-8-2グリッドの出土。最大径は推定で3.8~4.0cmを測り、厚さは2.1cmである。ヘラ削り整形後、ていねいに磨いている。孔もまたていねいに磨いている。胎土に白色石粒・雲母を含み、色調は暗褐色で、焼成は良好である。



第12図 その他の遺物

管状土錘 (第12図3～5)

いずれも荒い整形で、ヘラ削り後、ナデられている。3はL-14-3グリッドの出土で、現存長40mm、最大径14mm、孔径5～6mmを測る。胎土は白色石粒を含む。4は現存長44mm、最大径18mm、孔径8mmを測る。砂質のもので、黒褐色である。U-15-1グリッドの出土。5は表採資料であるが、現存長43mm、最大径14mm、孔径5～6mmを測る。砂質である。

土玉 (第12図15)

Q-10-3グリッド出土で、直径17mmを測る。孔は角をもって穿たれており、4×2mmの孔径である。暗淡褐色を示し、焼成は良好で、磨かれたものである。

近世、近代の遺物 (第12図・図版12)

本遺跡では近世、近代の遺物も数多く出土しており、出土したものとしては、スリ鉢を主体とする陶磁器片や刀子、角釘等の鉄製品、泥面子などの土製品があげられる。

4～7はスリ鉢の破片で、内面の溝から数種に分けられるようである。今回は代表的なものを図示するにとどまる。

10～12は管状土垂で、つくりはや・雑である。しかし胎土、焼成とも良好なものである。

13は刀子で、全長12.7cm、刀渡り8.8cmを測かる。片刃で、遺存は良好で、腐蝕はそれ程進んでいない。

16～17は寛永通宝である。

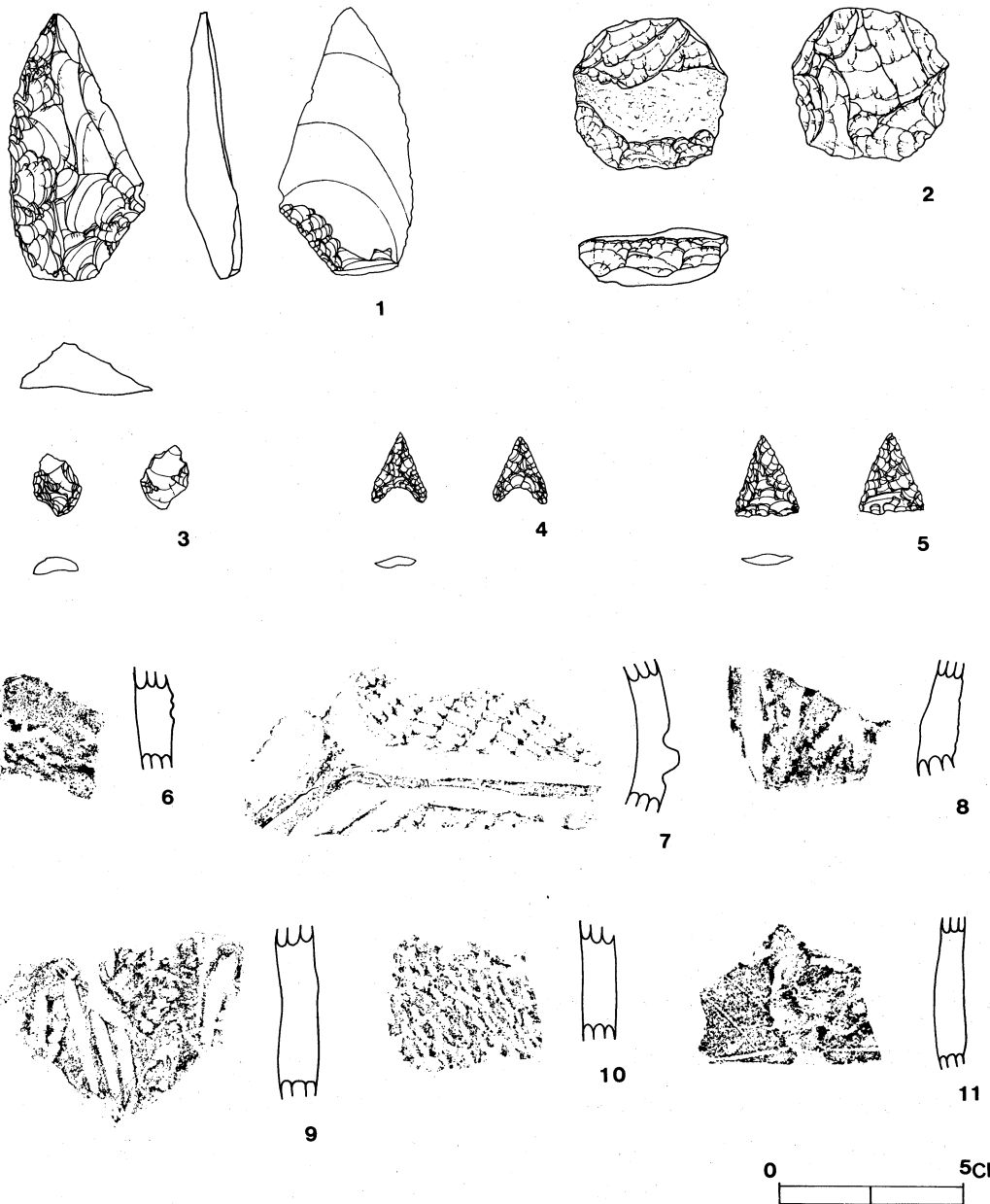
近世以降の遺物については、今回は代表的なものを図示したにとどまる。一方図示できなかったものに、泥面子と呼称されるものがある。これは円柱状のものと、七福神などを形象化したものに大きく分けられるようである。

また、高津地区の明治以降の歴史を示すものとして、機関砲の弾丸も出土しており、習志野練兵場としての周辺の環境をあらわしていると言えよう。

台地上での表採資料 (第13図・図版13)

今回発掘調査の対称となった区域以外にも各時代の遺物が台地上のいたる所で採集されているが、土師器あるいはそれ以後の時代の遺物がそれぞれ濃度の差はあるがほぼ台地全域にわたって採集されているのに対して、先土器・縄文時代の遺物はその分布する地点をある程度限定することができる。この台地の下を流れている川がその流れの向きを北から東へ向って変えている地点では、台地は南東から北西にむけてゆるやかに傾斜しているが、この北西の傾斜面では土師器の散布もみられる一方で、先土器時代から縄文時代にかけての遺物が比較的まとまって分布している。

1は頁岩を素材とした左右非対象の尖頭器で基部を欠いているが本来は9cm前後の大きさであ



第13図 台地上での表採資料

ったと考えられる。肉厚の剥片の表面を刃部となる部分を残して調整加工を加えているが、主剥離面では基部近くにわずかに手を加えているにすぎない。このように先端部片側縁に刃部を作り出し刃部と基部との中間が顎のように張り出す形態をもつ尖頭器は東内野型尖頭とされる尖頭器に属すると考えられる。2は安山岩製のエンドスクレイパーで表面には自然面を大きく残している。裏面には周縁から加撃が加えられ全体の形を円盤状の厚いエンドスクレイパーの形態に整えているが最初石核として作られたものを縁辺部に簡単な調整を行ないエンドスクレイパーに転用したものと考えられる。3は流紋岩製の小型のスクレイパーまたは石鏃と考えられるが上半部が欠失しているため、正確な形態は、不明である。小形の肉厚の剥片の縁を主剥離面の側から入念に調整加工が行なわれている。4、5はいずれもチャート製の石鏃で4は基部の抉りの深い凹基無茎鏃、5は基部に抉りをもたない平基無茎鏃でいずれも全面に入念な調整が加えられている。4の腸袂の先端部はやや円くなっている。この他に土器類も採集されているが大部分は細片のため図示できるものはわずかではない。6は胎土中に石英の砂粒を含んだ焼成の良好な土器で綾くり縄文が施文されているところから前期末から中期初頭に属するものと考えられる。7はキャリパーの器形をとると思われる土器の口縁部破片で複節縄文が地文として施こされた後貼付隆帯による曲線的な区画文が施こされている。8及び9は口縁から縦に垂下する沈線で区画された磨消縄文が施文された土器である。これらはいずれも赤褐色の厚手の土器で中期後半の加曾利E式土器に属すると考えられる。11は褐色の色調を有する比較的薄手の土器で、表面はかなり剥落してはいるが内面は入念な調整が行なわれている。細沈線による格子目文が描かれているところから後期の加曾利BⅡ式に属する粗製土器だと考えられる。

この他図示はできなかつたが黒曜石製のエンドスクレイパーがもう1点採集されているほかメノウ・黒曜石・頁岩・安山岩などの剥片多数と中期を中心とした縄文土器が採集されており、斜面部の表土層の堆積状態が非常に薄いことから今後の継続的な調査の必要性を感じさせられる。

第V章 小 結

高津新山遺跡の確認調査の概要については、以上述べてきたとおりである。グリッド発掘によって、広い調査対象地の全体の傾向の把握を目的としたものであったが、遺構の確認についてはなお不十分ではなかったかと考えている。しかしながら竪穴住居址34軒、掘立柱穴列5基、土壇92基、溝状遺構18条という遺構検出の資料が得られたことについてはある程度の成果を得たと考えたい。

出土した遺物からは、先土器時代より平安時代の長い間この台地が生活の場として使われ、古墳時代後期以降は集落として営まれたことがわかった。

先土器時代のポイント、ナイフ形石器の出土は、新たな知見である。これらは殆んどのもものが耕作土乃至ローム漸移層からの出土であった。今回の確認調査では、遺構等が所在することもあり、ローム層を掘り下げることが出来なかったが、一部ソフトロームを掘り下げたS-14-15グリッドでは黒曜石剥片が出土しているため、将来的にはローム層中の精査が必要とされるだろう。

縄文時代は、土器の出土量は少なく、遺構の所在は明らかにできなかった。晩期後半の土器は台地先端部で出土したが、3～5cmの包含層が部分的に所在するにすぎない。縄文時代の包含層は殆んど台地上にはなく、台地に入り込む谷津の埋没土を中心に出土している。これらより該期の遺構所在の可能性は薄いと思われる。

古墳時代以降より平安時代の遺構は、調査した2軒を除いて確認面で試掘をとめたため、時期把握は困難である。しかし土師器等の出土状況から見ると、平安時代の遺構が主体となろう。遺構所在の分布はS区より入る谷津に対して、谷頭付近では取り囲むように所在し、台地中央部より先端部では西側に多く確認できた。この傾向は、住居址の検出傾向に指摘できる。

遺物についてみると、古墳時代後半の土器は調査区南西のU、V-17区を中心としており、奈良時代はL、M、N-14、15区にその出土が多い。しかし出土量としてはそれ程多くはなかった。

以上、確認調査によって得られた知見によって、概要をまとめてきた。しかし今回の確認調査は遺跡全体の約50%について実施した訳であり、遺跡の全体的把握を行うためには、残り部分についても継続して、確認調査をする必要があると思われる。

図

版



遺跡遠景（東側・八千代中学校屋上より）



遺跡近景（R・S・T区）

図
版
2



発掘調査風景



高津新山遺跡の層序



第01号住居址

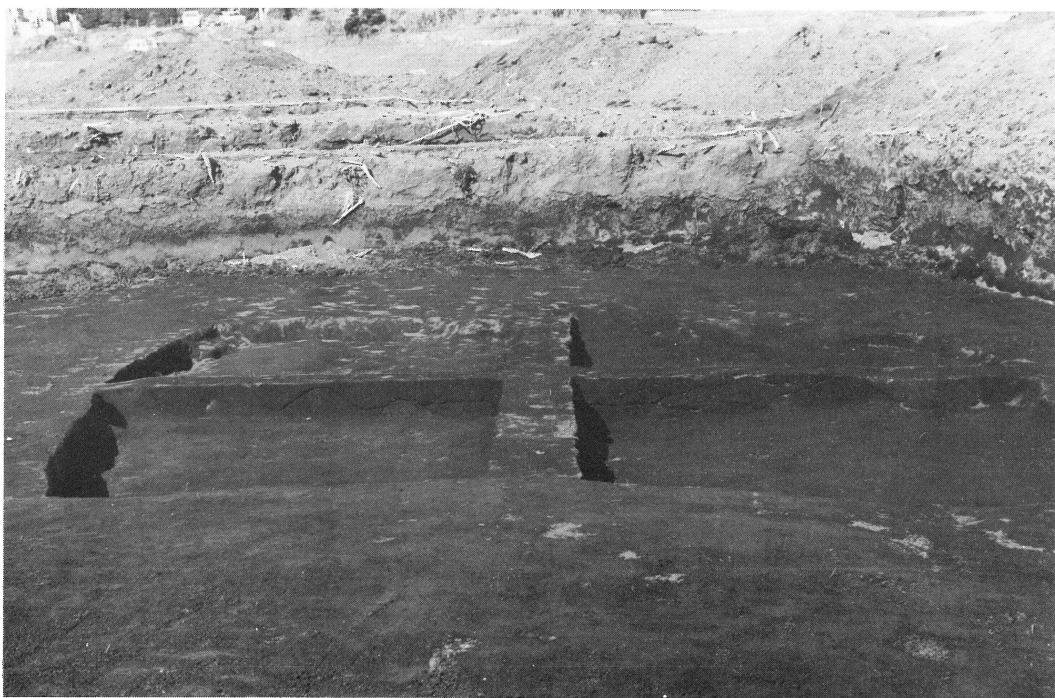


第01号住居のカマド

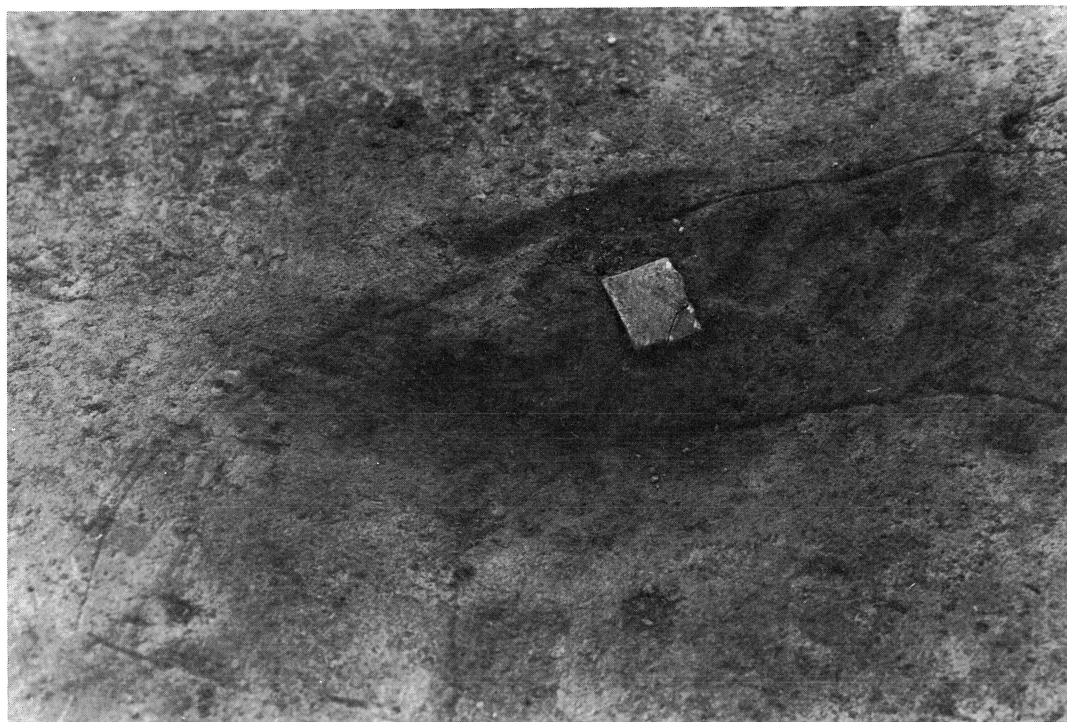
図
版
4



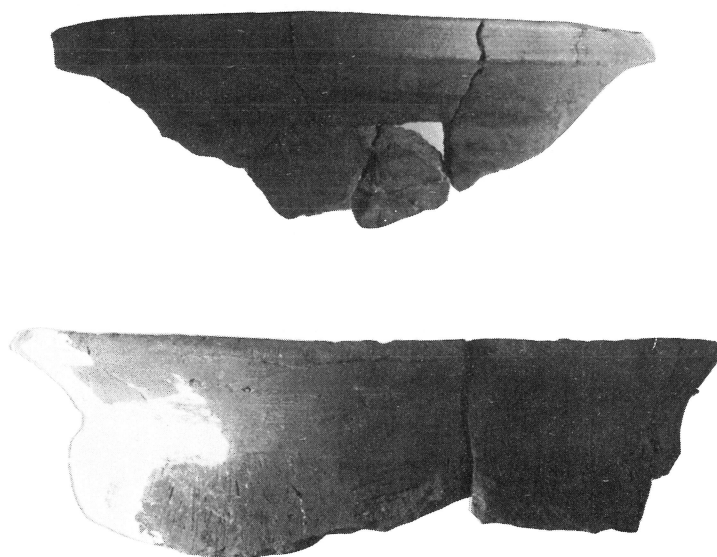
第02号住居址



第02号住居の土層堆積



第02号住居址の遺物（砥石出土状態）

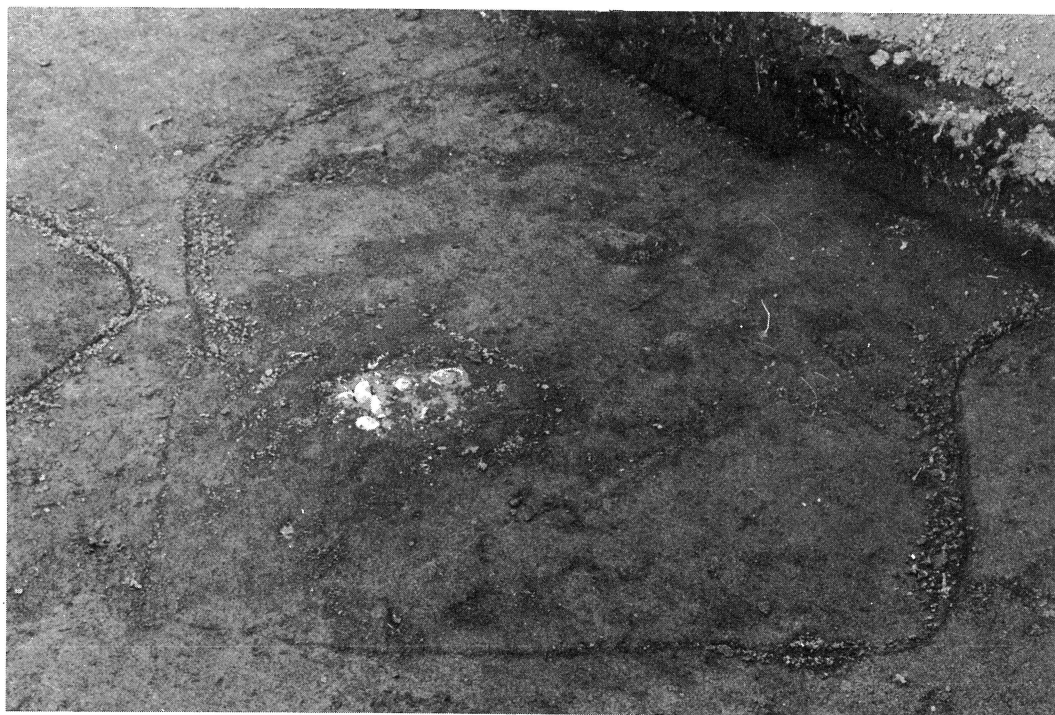


第02号住居址の遺物

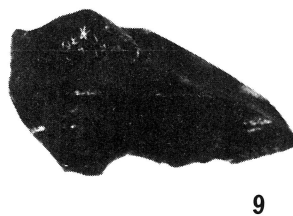
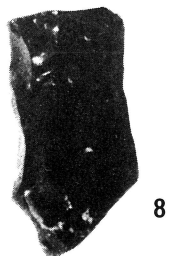
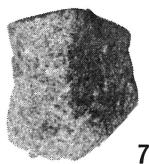
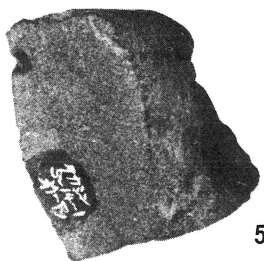
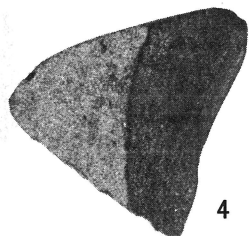
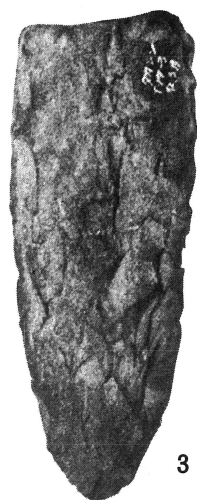
図
版
6



第03号住居址確認状態及び貝層確認状態

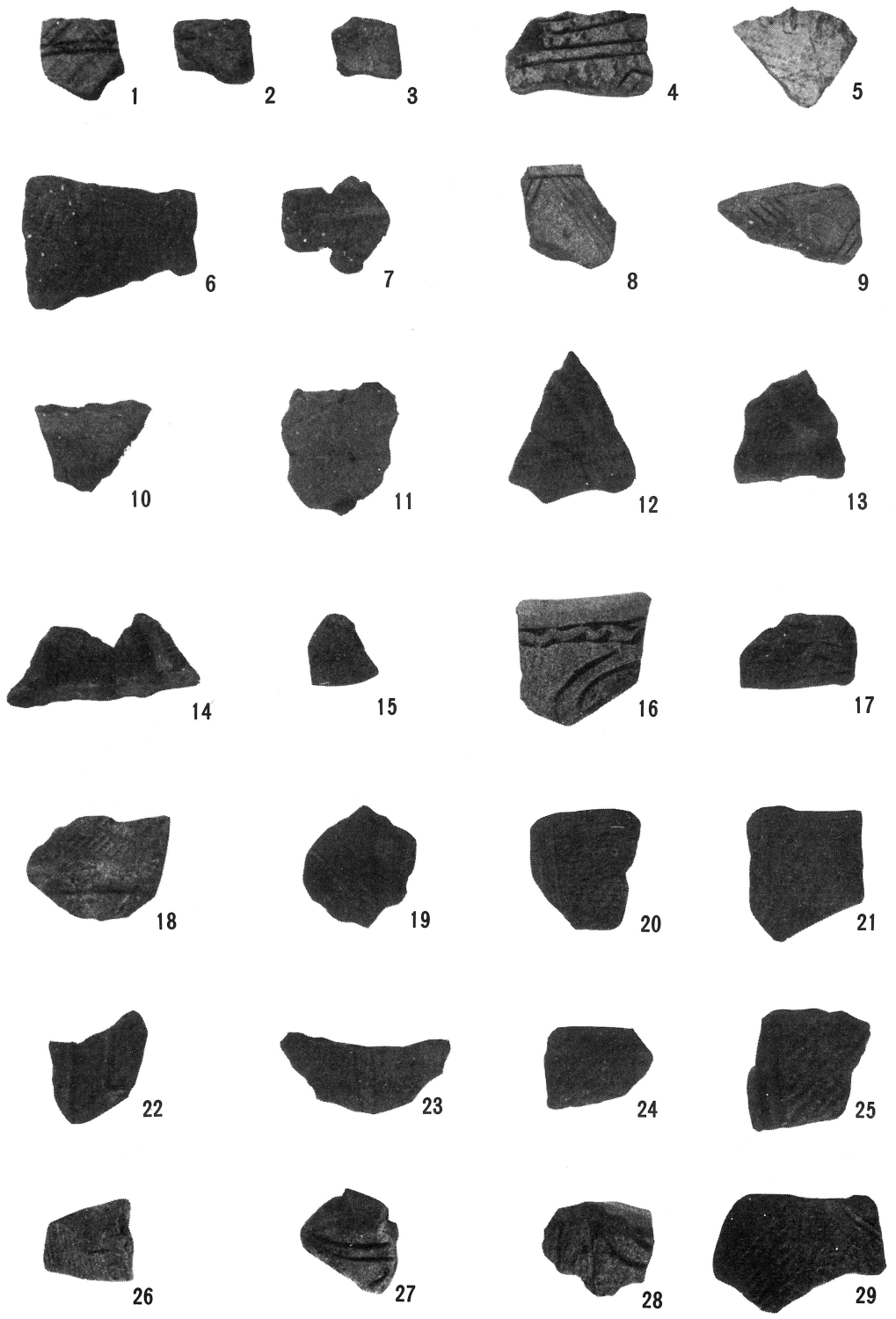


貝層出土坑確認状態

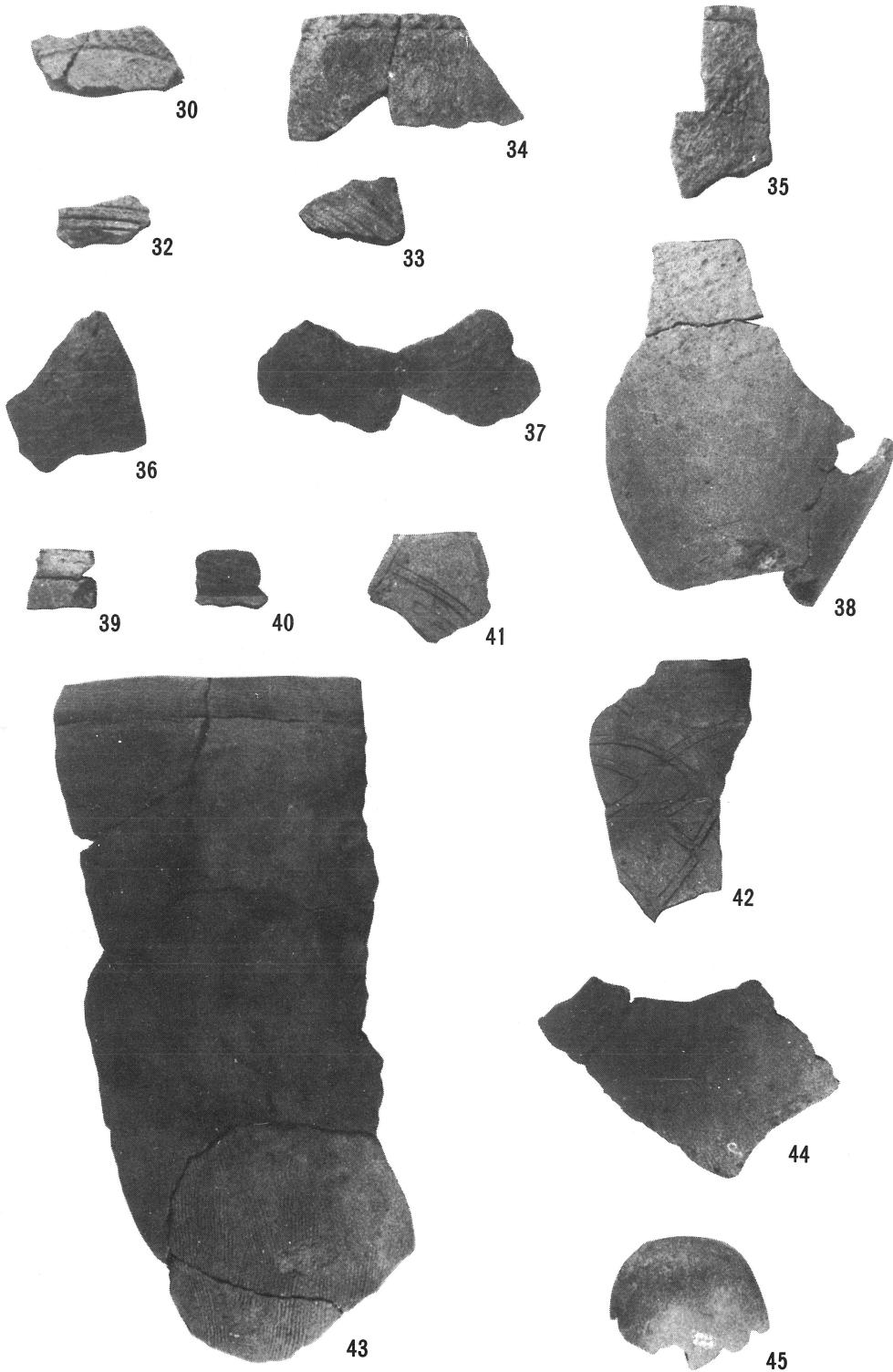


先土器時代の遺物

図
版
8



縄文時代の遺物（1）



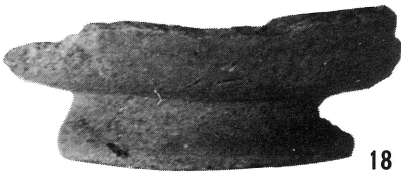
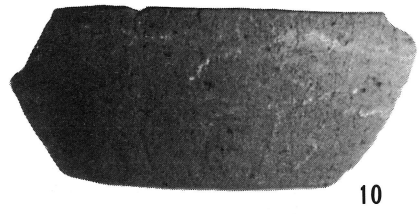
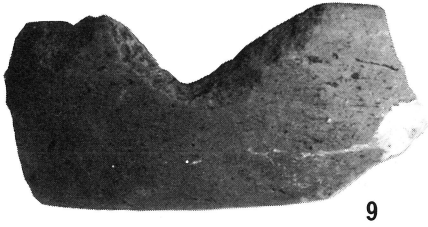
縄文時代の遺物（2）

図

版
10



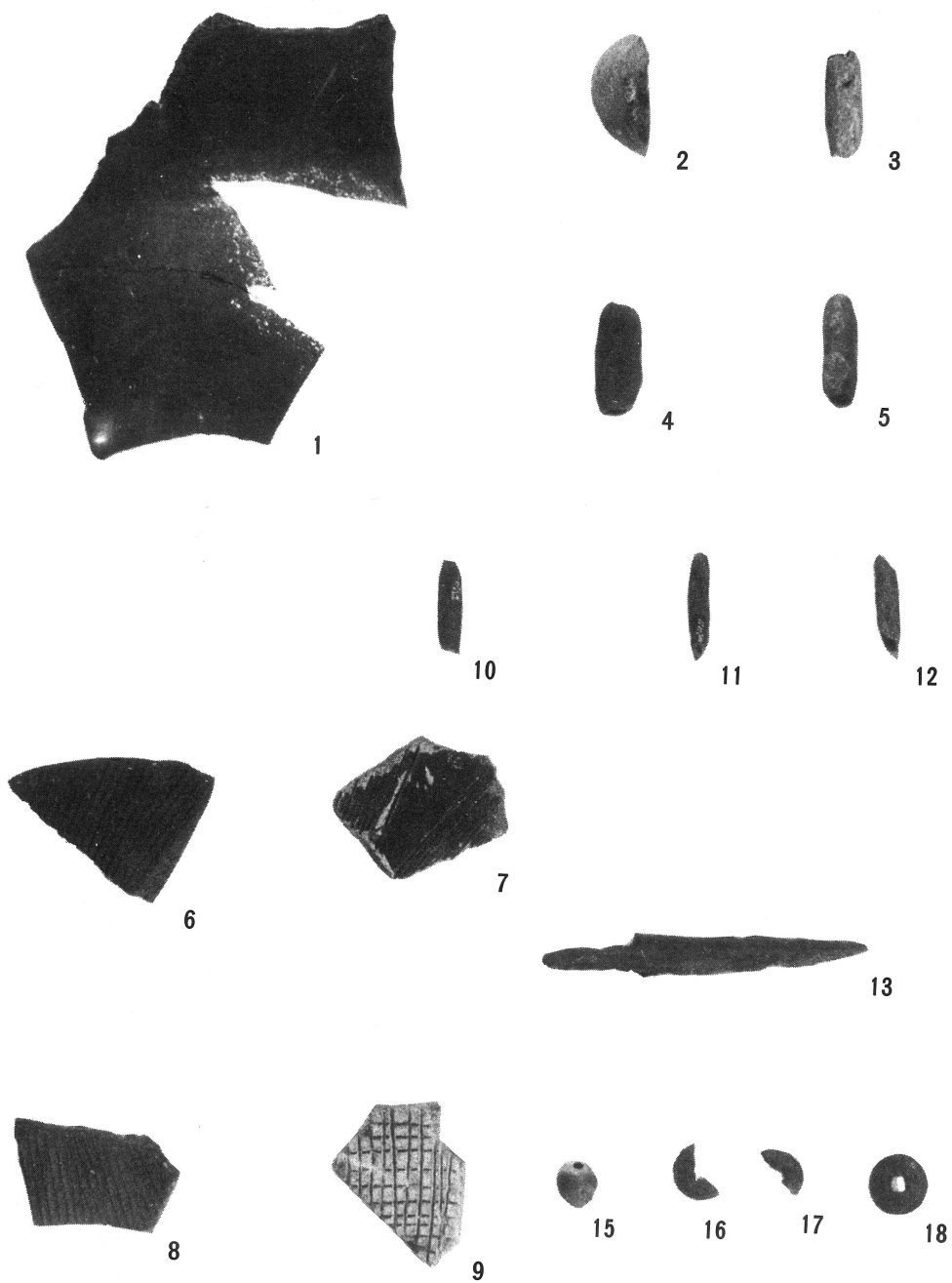
グリッド出土の土師器・須恵器（1）



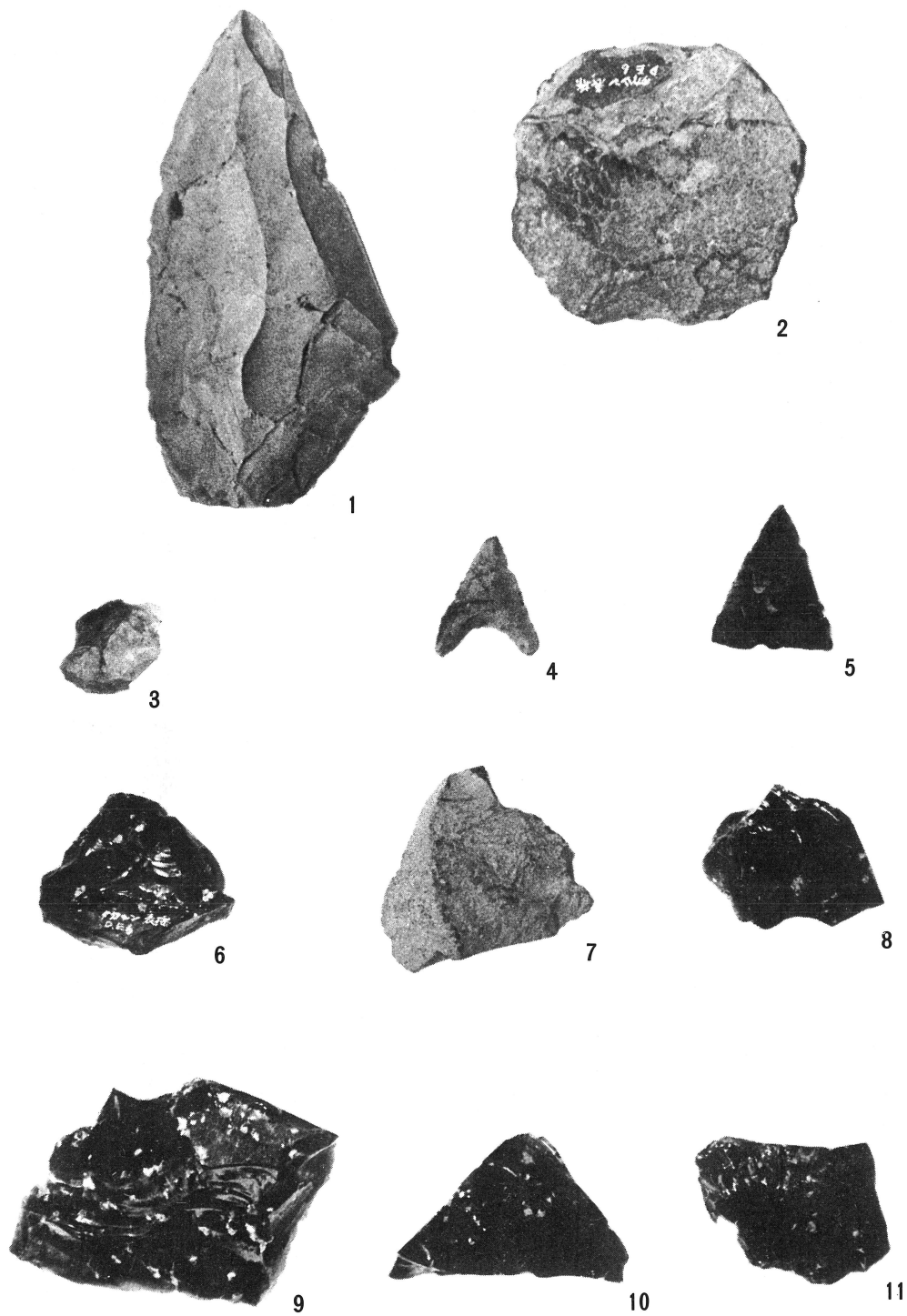
グリッド出土の土師器・須恵器（2）

図

版
12

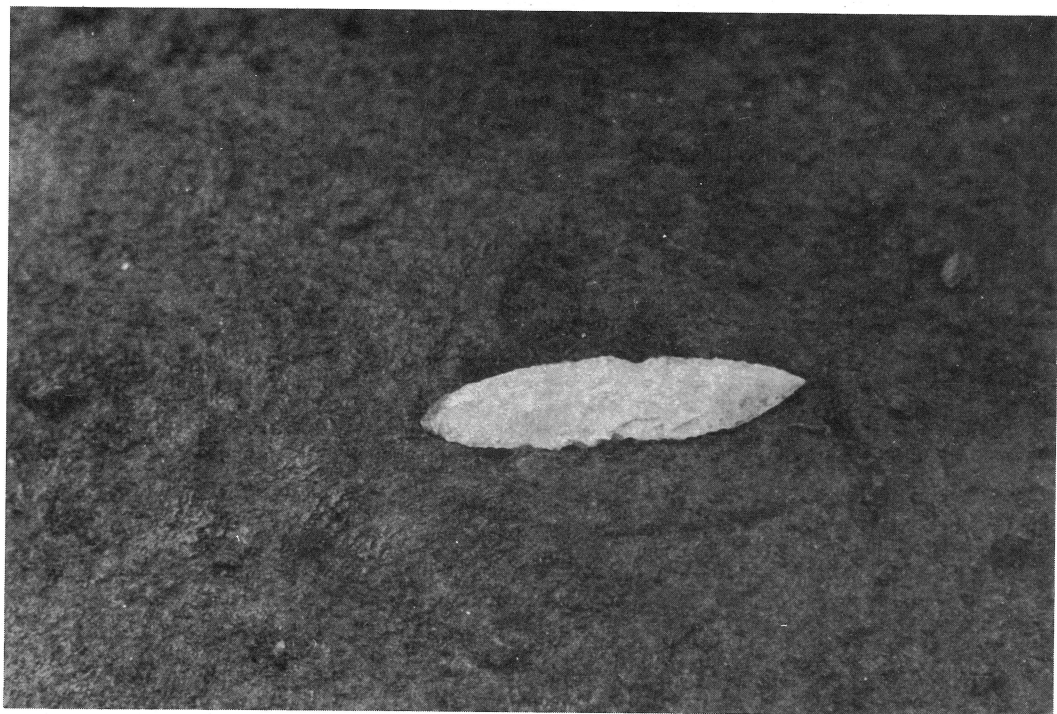


その他の遺物



台地上での表採資料

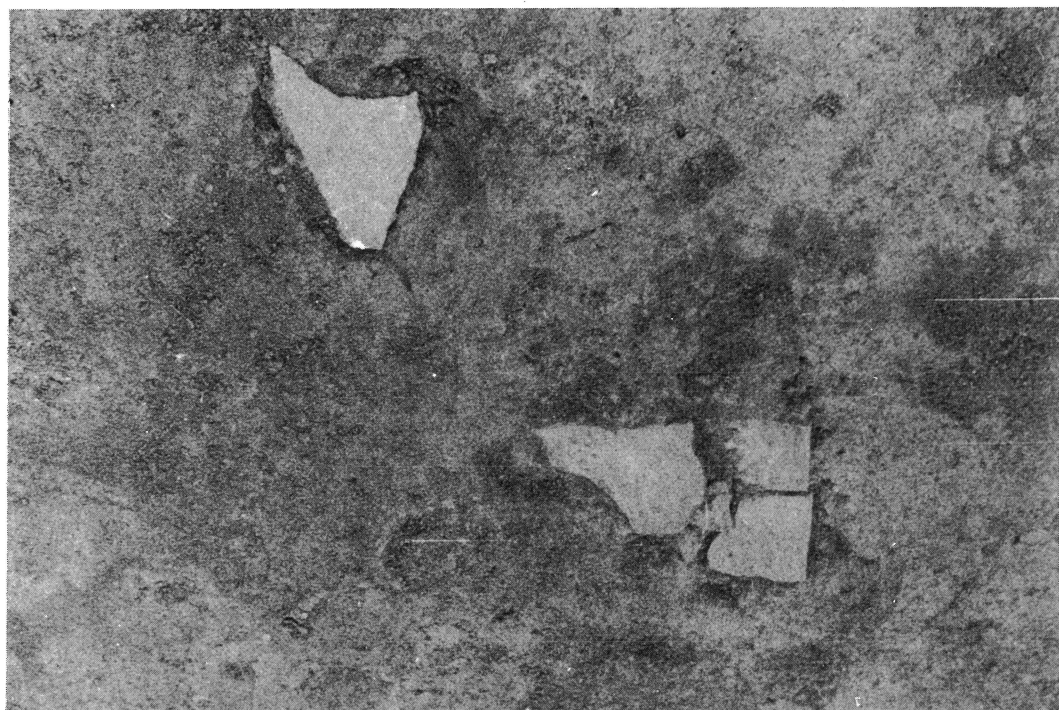
図
版
14



ポイント出土状態



土師器甕出土状態



縄文式土器出土状態



土師器坏出土状態

千葉県八千代市高津新山遺跡

—昭和56年度確認調査の概要—

印刷日 1982年3月20日

発行日 1982年3月31日

発行 八千代市教育委員会

印刷 (株)山下印刷



第2図 高津新山遺跡の地形測量図及び遺構

出土グリッド分布図

1	5	9	13
2	6	10	14
3	7	11	15
4	8	12	16

0 50m

